

荒井信一著作目録

戸 邊 秀 明

《凡例》

- * 本目録は、歴史家・荒井信一（1926～2017年）の執筆による文章、あるいはその談話が署名入りで発表された文献のうち、2018年8月末日までに確認できた書誌情報を集約・整理したものである。時期は、荒井が大学卒業後に在野の歴史研究者として活躍を始めた1950年から最晩年の2016年まで、65年余に及ぶ。
- * すべての文献を編年順で配列した。同一月発行の場合は、重要性の高いものから挙げた。ただし新聞掲載文献については、可能な限り発行日順で通した。
- * 各文献冒頭の01～12は発行月を表す。00は、発行月が不明の文献を表す。新聞など月日まで必要な文献は、掲載紙誌のタイトル・号数の後の丸括弧内に「(01.01)」のように記した。また「*」以下でシンポジウム開催期日などを記載する場合も、1990年1月1日＝「1990.01.01」とした。
- * 目安として、各文献冒頭【 】に以下の分類を示した。
【単著】【共著】【編著】【編集】【共編】【論文】【論説】【概説】【時評】【講演】【報告】【解説】【書評】【随想】【談話】【短文】【事典】【対談】【座談会】【翻訳】【監修】【声明】
 - ・【論説】：学術論文以外の論考で概説や時評等を除いたものは、長短にかかわらず、おおむね「論説」とした。ただし、荒井の場合、いわゆる論文と種々の批評文とは厳密には分けられないことが多いため、この区分は便宜的である。
 - ・【書評】：学会誌掲載の書評・文献紹介のほか、新聞に掲載した短評記事等も一括した。
 - ・【短文】：参加記やアンケート回答、事務的な報告や序跋、編集後記等は、この分類に一括した。
- * タイトル「 」内の〈 〉は、その文献が掲載された紙誌で独自に設定された掲載欄の名称や、叢書やリレー連載の総題などシリーズ名を表す。また発行者名の直後に記した〈 〉内は、新書等の種類を表す。
- * 新聞・雑誌掲載文献のタイトルのうち、書評については対象著作名の後に主要な見出しを挙げた。その他の文献についても、主要な見出し、もしくは内容をよく表すと思われるものを選択した。
- * 雑誌等逐次刊行物については、編者・発行者は誌名の初出時のみ記した。新聞については

荒井信一著作目録

発行者も略した。編者と発行者が同じ場合は「編／発行」との記載は略した。また誌名の副題も適宜略した。

* 頁の表記は、xp. で総頁数を、pp. x～xx で掲載頁を著す。また単著等の総頁数は、本文だけでなく目次・索引も含めた総頁数を算定して掲げた。

* 共著者・共編者、対談者・座談会出席者等については、各文献末尾の「※」以下に、荒井を除く全員を付した（ただし出席者多数もしくは氏名不詳のため、記載を簡略した文献が若干ある）。なお、「※無署名」とした文献の採録については、本目録末尾の「付記」を参照されたい。

* 必要な場合、書誌事項に続く「*」以下で、関連情報を補足した。

* 文献の再録や翻訳については、「⇒」の後に採録先の書誌事項を記した。荒井自身の単著への収録については、次の略称で対応を示した。なお、再録時の改題や加筆等の詳細に関する注記は略した。

『第二次』 = 『第二次世界大戦』

『アジア』 = 『現代史におけるアジア』

* 荒井自身による資料の切り抜きや自筆業績書等から執筆がわかるものの、書誌情報の完全な把握ができていない文献については、末尾に「*未見」等、その旨を記した。

* 目録の末尾に、参考として荒井の著書（編著を含む）に対する主要な書評を掲げた。

* その他、目録作成の経緯や留意点については、本目録末尾の「付記」を参照されたい。

1950 年

07 【時評】「恐怖の国民投票：火薬庫バルカンへの干渉〈ギリシヤ 1947〉」、『東京大学学生新聞』53〔特集 世界史と内乱〕(07.27), 東京大学学生新聞会, p.2

09 【論説】「〈研究動向〉伝記への提言」、『歴史学研究』147, 歴史学研究会, pp.45～47

11 【書評】「合衆国戦略爆撃調査団／正木千冬訳『日本戦争経済の崩壊』」、『歴史評論』26, 民主主義科学者協会, pp.84～86

1951 年

02～54.06 【監修】生活百科刊行会編・発行『私たちの生活百科事典』全17巻・増刊3巻
※史実校閲共同担当者：高橋碩一・古島和雄 *当初は小山書店発行

06 【単著】『平和の歴史〈中学生歴史文庫 世界史6〉』, 福村書店, 101p. ⇒同シリーズの三枝博音『産業革命』, 鈴木正四『フランス革命』と合本, 3名共著のかたちで『中学生歴史文庫 世界史II』(福村書店, 1954.11)として再刊, 頁数・紙型とも同じ

1952年

- 03 【共著】生活百科刊行会編『私たちの生活百科事典16 歴史』, 小山書店, 160p. ※「内容を計画した人」(計6名), 「この本の文章を書いた人」(計7名)の一人として記載, 共著者: 小澤圭介・小島一仁・酒井桐男・佐藤伸雄・林礼二・古島和雄(執筆分担の明示なし)
- 09 【書評】「元外交官のメモワール 何れも弁明の書: 東京裁判の資料を出ない事実」, 『図書新聞』163 (09.27), 図書新聞社, p.3 *対象書籍: 東郷茂徳『時代の一面』, 大橋忠一『太平洋戦争由来記』, 来栖三郎『日米外交秘話』, 重光葵『昭和の動乱』

1953年

- 05 【書評】「ハーシェル・メイヤー著『第二次大戦の史的分析』 独占資本の悪を描く」, 『図書新聞』194 (05.09), p.2
- 06 【書評】「特集 太平洋戦争をめぐる本」, 『図書新聞』201 (06.27), p.2 *対象書籍: 『秘録大東亜戦史』, 『大東亜戦争全史』, 『太平洋戦争前史』, 『太平洋戦争原因論』, 『太平洋をめぐる日米財閥』
- 08 【書評】「深見秋太郎著『二十世紀の外交史』 自主性ある研究: さらに, 理論化への努力がのぞまれる」, 『図書新聞』210, (08.29), p.2
- 10 【座談会】「この本囲んで 小倉金之助他監修『私たちの生活百科事典』」, 『図書新聞』216 (10.10), p.4 ※出席者: 石黒修・平田寛・辻康信・梅本隆司, 荒井は司会, 整理は編集部の責任による
- 11 【共著】歴史学研究会編『太平洋戦争史2 中日戦争』, 東洋経済新報社, 278p. ※荒井は, 各章の「政治」関連記述について, 遠山茂樹・今井清一・川村善二郎・藤井松一・藤原彰と分担執筆
- 12 【共著】歴史学研究会編『太平洋戦争史3 太平洋戦争前期』, 東洋経済新報社, 286p. ※荒井は, 各章の「政治」関連記述について, 遠山茂樹・今井清一・川村善二郎・藤井松一・松本貞雄と分担執筆
- 12 【論文】「近衛文磨: 「平和への努力」を中心として」, 井上清編『日本歴史講座7 現代篇』, 河出書房, pp.230~236
- 12 【書評】「論じられた歴史 “教育”: “民族の問題” に労作」, 『図書新聞』225 (12.12), p.3 *「どんな本が出たか: 1953年の回顧」の「歴史」項目

1954年

- 02 【共著】毎日新聞社出版版図書編集部編『目で見える歴史: 日本・東洋・西洋』, 毎日新聞社, 224p. ※共著者: 高橋磯一・古島和雄・大石慎三郎

荒井信一著作目録

- 04 【事典】『私たちの生活百科事典 増巻1 世界人名事典』, 生活百科刊行会, 432p. ※項目執筆者全 38 名の一人 (執筆分担の明示なし)
- 04 【短文】『『目で見る歴史』と私たちの立場』, 『日本読書新聞』741 (04.12), p.2 ※共著者: 高橋碩一・古島和雄 *尾鍋輝彦による同書書評「欠陥の多い編集」(『日本読書新聞』739 (03.29), p.2) への応答
- 06 【座談会】「歴史教育は何を教えるべきか」, 教育文庫編集部編『社会科教育の進路〈教育文庫3〉』, 総合教育研究所, pp.27~57 ※出席者: 児玉幸多・遠山茂樹・中野良道・大森良治
- 09 【論文】「アメリカ極東政策と田中外交」, 『歴史学研究』175 [特集 日米関係の史的究明], pp.21~30
- 10 【書評】「民科歴史部会編『世界歴史講座』(全6巻) 特色は現代史を重視」, 『図書新聞』269 (10.23), p.2
- 12 【概説】「第一次世界大戦」(第5章), 尾鍋輝彦監修代表『世界史講座5 帝国主義』, 東洋経済新報社, pp.153~161, 181~239 *ただし, 同章第1節 a~d・f, 第2節 a・b は別著者
【短文】「あとがき」, 同上『世界史講座5』, pp.327~328

1955 年

- 05 【書評】「国際的連繋の中へ: 歴史雑誌評」, 『図書新聞』296 (05.14), p.8

1956 年

- 06 【概説】「フランスと東ヨーロッパ」・「ワシントン会議」(以上第6章第2節 b-ニ, c-ハ), 「民族解放運動の発展」・「ロシア革命と中国」(以上第6章第3節 a, d-イ), 「満州事変」(第7章第1節 c), 「中近東情勢の緊迫化」(第8章第2節 a-ロ), 『世界史講座6 ロシア革命 第二次世界大戦』, 東洋経済新報社, pp.38~42, 47~51, 56~57, 84~93, 127~136, 229~234
【短文】「あとがき」, 同上『世界史講座6』, pp.365~366
- 06 【書評】「“現代史” という名の三著」, 『図書新聞』354 (06.30), p.5 *対象書籍: ノイマン著『現代史: 未来への道標』, 上原専禄他監修『現代アジア史』, エイドゥス著『日本現代史』
- 10 【概説】「世界平和運動の展開」・「アメリカの朝鮮戦争準備」(以上第3章第3・4節), 『世界史講座7 平和への道』, 東洋経済新報社, pp.110~117
【短文】「あとがき」, 同上『世界史講座7』, pp.321~322
- 12 【座談会】「共同討議 世界史像形成のために: 諸国民の世界史認識と世界像 A」, 『世界

史講座8 世界史の理論と教育』, 東洋経済新報社, pp.11~41 ※出席者: 上原専禄・尾鍋輝彦・江口朴郎・山本達郎・野原四郎・旗田巍・三木亘

【座談会】「共同討議 世界史をどうみるか: 生徒と教師の世界史認識 A 生徒」, 同上『世界史講座8』, pp.229~246 ※出席者: 鈴木亮・大江一道・三木亘・久坂三郎・吉田悟郎・斎藤周一

1957年

02 【単著】『絵で見る世界史8 二十世紀の世界』, 国民図書刊行会, 165p.

03 【論文】「第一次世界大戦と日本帝国主義: 二十一箇条要求をめぐる日米関係」, 歴史学研究会・日本史研究会編『日本歴史講座6 日本帝国主義』, 東京大学出版会, pp.9~33

05 【書評】「諸科学の成果を摂取: 『思想』五月号(特集・歴史)を読んで」, 『図書新聞』399(05.18), p.7

06 【短文】「編集後記」, 『歴史教育研究』4, 歴史教育研究所, p.42

09 【座談会】「歴史教育と視聴覚教育」, 『歴史教育研究』5, pp.2~16 ※出席者: 大江一道(司会)・吉田悟郎・菱刈隆永・岡部広治・三木亘・佐藤伸雄・明石総一・小島晋治・石川澄雄・久坂三郎・高橋碩一・高索辰正

10 【論説】「戦後の歴研の歩みについて」, 『歴史学研究』212, pp.47~52 ※無署名

【短文】「編集後記」, 同上『歴史学研究』212, p.52

12 【座談会】「東西交渉史の諸問題: 世界史におけるインド, 南アジア」, 『歴史教育研究』6, pp.2~13 ※出席者: 三木亘(司会)・荒松雄・伊瀬仙太郎・坂本徳松・前嶋信次・三上次男・吉岡力・明石総一・井上和男・大江一道・阪東淑子・中岡三益・菱刈隆永

【短文】「編集後記」, 同上『歴史教育研究』6, p.42

1958年

01 【書評】「ソ同盟外務省編『第二次大戦中の米英ソ秘密外交書簡』ソ連の立場正す」, 『図書新聞』434(01.25), p.4

02 【概説】「世界分割」・「日露戦争と同盟協商体制の進展」, 村瀬興雄編『世界史大系13 帝国主義と第一次世界大戦』, 誠文堂新光社, pp.210~241

02 【短文】「大会についての委員会の討論より」, 『歴史学研究』216, p.51

03 【書評】「ジューコフ監修『極東国際政治史 1840~1949』民衆の役割^{ママ}りを強調: 残念な善玉悪玉史観の混入」, 『日本読書新聞』942(03.17), p.2

03 【書評】「中山治一著『日露戦争以後: 東アジアをめぐる帝国主義の国際関係』」, 『日本読書新聞』942(03.17), p.2

03 【短文】「編集後記」, 『歴史教育研究』7, p.44

- 06 【座談会】「『明治』時代の評価をめぐって」, 『歴史教育研究』8, pp.2~11 ※出席者: 松島栄一・小西四郎・下村富士男・吉田悟郎・三木亘・江口朴郎・明石総一・下山三郎・中村英勝・清水勝太郎・小沢栄一

【短文】「編集後記」, 同上『歴史教育研究』8, p.44

- 09 【書評】「J・イートン著『内気なバブズ』 ルーズベルト大統領夫人の伝記」, 『図書新聞』468 (09.20), p.7

- 09 【座談会】「ドゴール政権とフランス現代史の問題」, 『歴史教育研究』9, pp.2~11 ※荒井による「前書き」(p.2)あり ※出席者: 金沢誠・白井健二郎・山上正太郎・鈴木正四・山極潔・板垣雄三

【短文】「編集後記」, 同上『歴史教育研究』9, p.44

1959年

- 02 【概説】「第一次世界大戦と日本の地位」・「ワシントン体制の意義」, 江口朴郎編『世界史大系15 ロシア革命とヴェルサイユ体制』, 誠文堂新光社, pp.198~227

- 03 【短文】「編集後記」, 『歴史教育研究』11, p.46 ※共著者: 大江一道

- 04 【概説】「〈研究会〉歴史教育の問題点12 米騒動から普選運動へ」, 『歴史評論』104, 民主主義科学者協会歴史部会, pp.71~80,91 ※共著者: 原田勝正, ただし文責は「東京支部委員会」

- 07 【論説】「現代史と教育: 第二次世界大戦史の扱い方」, 『世界史大系 月報』14 (同大系16「全体主義・民主主義の対立と第二次世界大戦」付録), 誠文堂新光社, pp.5~7

1960年

- 01 【座談会】「〈歴史教室の窓4〉現代史の研究」, 『歴史教育研究』14, pp.2~14,48 ※出席者: 大江一道(司会)・小西四郎・市古宙三・羽生敦・岡部広治・明石総一・石川澄雄・河合佳枝・清水勝太郎・阪東淑子

- 02 【論説】「日露戦争と満洲問題」, 『歴史学研究』238 [小特集 日露戦争の評価をめぐって], pp.27~28

- 03 【論文】「危機意識と現代史: 「昭和史」論争をめぐって」, 現代の発見編集委員会編『現代の発見6 戦後精神』, 春秋社, pp.53~92 ⇒『アジア』第I部一 ⇒歴史科学協議会編(藤井松一編集)『歴史科学大系34 現代史の課題と方法』, 校倉書房, 1982.09

- 08 【書評】「R・ホーフスタッター著『アメリカの政治的伝統II: その形成者たち』 政治家の個性に光: 状況がかれらを改革者に」, 『図書新聞』565 (08.13), p.4

1961年

- 04 【座談会】「世界史像形成のすすめ：『日本国民の世界史』をめぐって」, 『歴史評論』128, pp.2~15 ※出席者：吉田悟郎（司会）・江口朴郎・太田秀通・寺沢茂・西嶋定生・野原四郎・阪東淑子
- 09 【書評】「宮原誠一・中屋健一・別枝達夫編『少年少女世界の歴史』全12巻 世界の歴史を名著（ヘロドトスからチャーチルまで）で紹介」, 『図書新聞』619（09.02）, p.6
- 11 【随想】「『反逆の歴史家』：その思想的系譜をめぐって」, 『労働運動史研究』28 [特集 田中惣五郎追悼], 労働運動史研究会編／日本評論新社発行, pp.14~16
- 12 【論説】「現代史と教育：第二次世界大戦史の扱い方」, 『成蹊論叢』創刊号, 成蹊高等学校, pp.29~34

1962年

- 11 【書評】「『ソヴェト科学アカデミー版 アメリカ史・現代1』 重点は第二次大戦：ルーズヴェルトの評価に疑問」, 『図書新聞』680（11.10）, p.2

1963年

- 07 【論文】「第二次世界大戦」, 『岩波講座 日本歴史21 現代4』, 岩波書店, pp.49~93
⇒『第二次』
- 10 【論説】「第二次世界大戦とインド」, 『秀英通信』4, 秀英出版, pp.9~13

1964年

- 06 【論文】「太平洋戦争の歴史的意義：朝日新聞社刊『太平洋戦争への道』批判」, 『歴史学研究』289 [特集 太平洋戦争の諸問題], pp.1~13 ※共著者：今井清一・藤原彰・野沢豊 ※荒井の分担は「欧米情勢と日本」(pp.8~11)

1965年

- 04 【論文】「第二次世界大戦とアジア：方法的考察」, 『成蹊論叢』4, 成蹊中・高等学校, pp.60~83 ⇒『第二次』
- 07 【論説】「毒ガスに抵抗したハダシの英雄たち：エチオピアの利権に狂ったイタリア侵入軍の横暴きわまる残虐秘録！」, 『丸』18-7（通号218）[大特集・大宅壮一監修 世界の侵略戦争を斬る], 潮書房, pp.92~95
- 08 【短文】「大会後の現代史部会の動き」, 『歴史学研究 月報』68, 歴史学研究会, pp.7~9
- 09 【論説】「『大学における歴史教育』の問題性」, 『歴史学研究 月報』69, pp.1~3

- 11 【論説】「『大学における歴史教育』の問題性」, 『歴史学研究』306 [特集 歴史教育と歴史研究], pp.27~28
【座談会】「大学歴史教育の現状と問題点」, 同上『歴史学研究』306 [同上特集], pp.40~49 ※出席者: 太田秀通・田中陽児・椽川一朗・永原慶二・山口啓二・吉田悟郎・大江一道, 荒井は司会
- 11 【短文】「ハルガルテン博士の来日について」, 『歴史学研究 月報』71, pp.1~3

1966年

- 03 【短文】「大会準備にあたって」, 『歴史学研究』310, pp.32~34 * 「現代史部会」関連記事
- 04 【論文】「大隈・寺内内閣の対華政策に関する覚書: 1914~1917年」, 『成蹊論叢』5, pp.4~45
- 07 【時評】「朝鮮人学校の問題に関するノート」, 『歴史学研究』314, pp.55~58
- 07 【座談会】「シンポジウム「帝国主義と歴史家」: ハルガルテン氏をかこんで」, 『歴史学研究』314, pp.34~44 ※出席者: ハルガルテン・太田秀通・和田春樹・石井寛治・山田昭次・西川正雄
- 07 【座談会】「〈歴史教室の窓 再検討シリーズ7〉第二次世界大戦」, 『歴史教育研究』40 [特集 現代史教育の問題点], pp.6~37 ※出席者: 鳥海靖・野原四郎・山極晃・山上正太郎 (以上講師)・今井莊三・西郷和次・竹井光二・水上敏雄・望月光円・吉岡力・吉田金一・吉田悟郎・(以下編集部) 明石総一・工藤泰・菱刈隆永 * 荒井は「講師」として出席
- 09 【論文】「戦後東アジア史の起点: 「連合国」と東アジア」, 『歴史学研究』316 [1966年度大会特集Ⅱ], pp.41~59 * 同年度歴史学研究会大会・現代史部会「第2次大戦後の東アジア: 日本・朝鮮・中国の民衆」報告, 討論要旨 (pp.59~61) に荒井発言あり (文責・松尾章一) ⇒『第二次』
- 10 【座談会】「〈歴史教室の窓 再検討シリーズ8〉戦後世界の起点: 第二次世界大戦の性格と戦後の諸問題」, 『歴史教育研究』41, pp.2~28 ※出席者: 小松良郎・鳥海靖・山極晃・山上正太郎 (以上講師), 西郷和次・水上敏雄・望月光円・吉岡力・吉田金一・吉田悟郎・吉村徳蔵・(以下編集部) 明石総一・工藤泰・菱刈隆永
【論説】「〈教師のための文献解題4〉何を, どう書くかで困惑: 「第二次世界大戦と戦後世界」」, 同上『歴史教育研究』41, pp.29~31

1967年

- 01 【座談会】「『明治百年』と国民の歴史意識」, 『歴史学研究』320 [特集 「明治百年」と

国民の歴史意識], pp.1~13 ※出席者:遠山茂樹・永原慶二・中村政則・三木亘・山田昭次

- 04 【短文】「〈巻頭言〉西洋の没落」,『歴史教育研究』43, p.1
- 05 【論説】「三国干渉 中国分割競争と日本:背後に錯綜する列強の利害〈近代日本の争点47〉」,『エコノミスト』45-18(通号1649,05.02),毎日新聞社,pp.80~85 ⇒改題「中国分割競争と日本:三国干渉」,家永三郎他編『近代日本の争点』中,毎日新聞社,1967.11,pp.136~145
- 05 【論説】「169. 1915年の対華21カ条要求に対して,列強はどのような反応・態度を示したのか。」・「172. 幣原外交は第1次大戦後の国際政治において,どのように評価されるか。」,前嶋信次・三上次男・吉岡力編『世界史の教室』下,吉川弘文館,p.82,85
- 07 【論説】「歓喜と失望に満ちた第三帝国の夜明け:芸術家を夢みた田舎青年ヒトラーに偉大な奇蹟が訪れるとき」,『丸』20-7(通号242)[ワイド特集 ヒトラーの戦い],pp.62~71
- 11 【論文】「ロシア第一革命とアジア:オスマントルコを中心として」,『学習院史学』4,学習院大学史学会,pp.1~13 ⇒『アジア』第Ⅱ部二
- 11 【論説】「祖国の敵ヒトラーは生きているか:狂気の独裁者に反逆した愛国者たちの栄光と悲劇」,『丸』20-11(通号246)[ワイド特集 実録/欧州戦記],pp.174~179
- 12 【論説】「対華21ヶ条要求 利権独占か,機会均等か:中国植民地化の主導権をめざして〈近代日本の争点76〉」,『エコノミスト』45-50(通号1681,12.05),pp.84~89 ⇒改題「権益独占か,「機会均等」か:対華21ヶ条」,井上清他編『近代日本の争点』下,毎日新聞社,1968.10,pp.64~73

1968年

- 01 【論説】「明治百年と歴史学者」,『図書新聞』942(01.01),p.5
- 02 【座談会】「「明治百年祭」をめぐって〈12・9討論集会記録〉」,『歴史学研究』333,pp.1~30 ※出席者:板垣雄三・山口啓二・遠山茂樹・横山正彦・松尾章一・犬丸義一・色川大吉・峰岸純夫・山田昭次・黒田俊雄・野村宣行・中島三千男・坂口勉・藤間生大・田港朝昭・江口朴郎・松島栄一・本多公栄・北島万次・大江志乃夫・青木健一 *荒井は板垣雄三とともに冒頭で報告
- 05 【論説】「ヒトラーは英本土での朝食を望んだ:世界征服を夢みる独裁者が描いたおそるべき未完成交響曲のすべて」,『丸』21-5(通号252)[立体特集 大上陸作戦],pp.111~117
- 05 【書評】「『明治百年問題 第三緊急特集』青木書店刊 戦後最大の反動政策に対抗」,『図書新聞』961(05.18),p.6

荒井信一著作目録

- 07 【論説】「『明治百年祭』の問題点」, 『日本の科学者』 3-1 (通号 11), 日本科学者会議, pp. 27~33
- 07 【短文】「委員会活動をふりかえって」, 『歴史学研究 月報』 103, pp. 2~4
- 08 【書評】「遠山茂樹『戦後の歴史学と歴史意識』 権力とたたかう武器目録」, 『図書新聞』 974 (08.17), p. 1
- 08 【短文】「討論要旨」, 『歴史学研究』 339 [1968 年度大会特集], pp. 61~63 ※共著者: 宮地正人 * 「現代史部会 ファシズムと変革主体」の討論記録
- 09 【論説】「されど海底艦隊は死せず: 三色旗の伝統と名誉を守りきったフランス海軍の勇氣ある記録」, 『丸』 21-10 (通号 257) [ワイド特集 第二次大戦 10 大秘密作戦], pp. 76~81
- 09 【座談会】「教科書裁判と戦後の歴史教育」, 『歴史学研究』 340 [特集 教科書裁判], pp. 34~41 ※出席者: 家永三郎・大江志乃夫・太田秀通・金沢嘉市・遠山茂樹・星野安三郎・本間昇・松尾章一・松島栄一・山田昭次
- 10 【座談会】「世界の中の『明治百年』」, 『歴史教育研究』 47, pp. 30~42 ※出席者: 川村善二郎・倉員保海 (以上講師)・石岡康男・小沢圭介・中村匡男・中村勤子・菱刈隆永・水口敏之・吉田悟郎・若井田典子・(以下編集部) 芹沢金三・山村良橘 * 荒井は「講師」として出席

1969 年

- 03 【論文】「日本外交とインド」, 大形孝平編『日印関係小史 (研究参考資料 143)』, アジア経済研究所, pp. 37~47 ⇒ 『アジア』 第Ⅱ部三
- 04 【論説】「トラファルガル この史上最大の海戦絵巻: 無敵を呼号するネルソン対ナポレオンが演じた一大艦隊決戦を再現すれば……」, 『丸』 22-5 (通号 267) [カスタム特集 最強艦隊列伝], pp. 62~65
- 10 【論文】「ソ連と中国 (1945~1958)」, 『講座現代中国 1 現代世界と中国』, 大修館書店, pp. 203~238
- 10 【書評】「歴史教育運動の課題: 高橋碩一著『歴史教育と歴史意識』の視角/民衆の主体的成長を確信」, 『図書新聞』 1034 (10.25), p. 2
- 10 【短文】「〈巻頭言〉 50 号発刊を記念して」, 『歴史教育研究』 50, p. 1

1970 年

- 01 【論説】「万国博覧会と進歩」, 『高等学校教科研究』 58, 好学社 * 未見, 頁数不詳 ⇒ 『アジア』 第Ⅲ部付論
- 05 【論説】「『講座日本史』 ことはじめ: 変革期の解明に重点/反動的歴史観に抗す」, 『東

京大学新聞』830 (05.18), p.3

1971年

- 03 【論文】「第二次世界大戦の意義」, 歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本史8 日本帝国主義の復活』, 東京大学出版会, pp.29~56 ⇒『第二次』
【論文】「序論」, 同上『講座日本史8』, pp.1~27 ※共著者: 藤原彰 (荒井執筆部分は pp.13~27)
- 04 【共編】『世界史における1930年代: 現代史シンポジウム』, 青木書店, 214p. ※共編者: 江口朴郎・藤原彰 *第1回現代史サマー・セミナー (1970.07) の記録をもとにした論文集
【論文】「第二次世界大戦の性格」, 同上『世界史における1930年代』, pp.146~156 ⇒『第二次』
- 04 【概説】「帝国主義とアジア: 日露戦争, 第一次ロシア革命の衝撃と民族運動」, 江口朴郎企画指導『日本と世界の歴史20 20世紀1 日露戦争・辛亥革命・第一次世界大戦』, 学習研究社, pp.202~209 ⇒『アジア』第II部一
- 05 【座談会】「二つの大戦の谷間」, 江口朴郎企画指導『日本と世界の歴史21 20世紀2 大正デモクラシー・ヴェルサイユ体制・アジア民族運動』, 学習研究社, pp.8~16 ※出席者: 野原四郎・藤原彰
- 06 【短文】「序論」, 歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本史10 現代歴史学の展望』, 東京大学出版会, pp.1~2
【座談会】「シンポジウム・現代歴史学の課題と展望」, 同上『講座日本史10』, pp.251~312 ※出席者: 永原慶二 (司会)・佐々木潤之介・芝原拓自・河音能平・脇田修・里井彦七郎・安丸良夫・江口朴郎・藤原彰・井口和起 *荒井は永原とともに司会
【報告】「報告I」, 同上『講座日本史10』, pp.251~256
- 09 【論文】「戦争の経過とファシズム諸国の占領政策」, 『岩波講座 世界歴史29 現代6: 第二次世界大戦』, 岩波書店, pp.3~60 ⇒『第二次』
- 11~73.11 【編集】歴史学研究会編『太平洋戦争史』全6巻, 青木書店 ※編集委員: 今井清一・江口圭一・野沢豊・藤井松一・藤原彰 *荒井は特に第5巻「太平洋戦争II 1942~1945」を担当, ただし当該巻には直接の執筆なし
- 11 【概説】「ロシア革命とヴェルサイユ体制」・「シベリア出兵・講和と日本」(以上, I-2-1・2)・「世界大恐慌」(III-1-1), 歴史学研究会編 (江口圭一担当)『太平洋戦争史1 満州事変1905~1932』, 青木書店, pp.36~49, 155~158
- 12 【書評】「二つの沖縄戦史: 防衛庁戦史と『沖縄県史』」, 『歴史学研究』379, pp.59~61 ⇒『アジア』第I部付論一

- 12 【編著・座談会】荒井信一編『シンポジウム日本歴史22 戦後史』, 学生社, 243p. ※出席者: 犬丸義一・江口朴郎・高橋碩一・遠山茂樹・藤原彰 *荒井は全体を通じて司会を担当し, 注も作成
【報告】「戦後史検討の意味」・「戦後イデオロギーと国民」, 同上『シンポジウム日本歴史22』, pp.7~10, 146~152

1972年

- 01 【概説】「世界恐慌の政治的諸結果」(I-1), 歴史学研究会編(今井清一担当)『太平洋戦争史2 日中戦争I 1932~1937』, 青木書店, pp.13~28
05 【概説】「張鼓峰事件」(II-1-4)・「ノモンハン事件: 局面転換への苦悩」(III-3), 歴史学研究会編(野沢豊担当)『太平洋戦争史3 日中戦争II 1937~1940』, 青木書店, pp.108~115, 227~248

1973年

- 01 【単著】『第二次世界大戦: 戦後世界史の起点』, 東京大学出版会〈UP選書112〉, 225p.
02 【論説】「重慶空襲とゲルニカ」, 『UP』4, 東京大学出版会, pp.24~27 ⇒『アジア』第I部付論二
04 【論文】「戦争責任について」, 歴史学研究会編『現代歴史学と教科書裁判』, 青木書店, pp.127~141 ⇒『アジア』第I部二
08 【概説】「三国同盟より日米交渉へ」, 『研秀版 日本の歴史14 大正・昭和』, 研秀出版, pp.114~119
09 【概説】「〈時代展望〉占領と講和」・「市ガ谷軍事法廷開く」・「極東裁判の判決」, 『研秀版 日本の歴史15 戦後史(上) 占領と講和』, 研秀出版, pp.57~64, 86~87, 114~115
09 【短文】「編集後記」, 『歴史教育研究』53・54合併, p.96
10 【概説】「〈時代展望〉世界の中の日本」, 『研秀版 日本の歴史16 戦後史(下) 世界の中の日本』, 研秀出版, pp.57~64
11 【概説】「講和条約の締結」(V-2)・「太平洋戦争の正しい認識のために」, 歴史学研究会編(藤井松一担当)『太平洋戦争史6 サンフランシスコ講和1945~1952』, 青木書店, pp.304~318, 335~342
12 【座談会】「十五年戦争をどうとらえるか」, 『歴史地理教育』219 [特集 十五年戦争をどう考える], 歴史教育者協議会, pp.42~61 ※出席者: 黒羽清隆・本多公栄

1974年

- 02 【座談会】「シンポジウム 世界史の中のユダヤ人: ユダヤ人とはなにか」, 『歴史教育研

- 究』55, pp.2~29 ※出席者：荒井献・木田献一・下村由一・藤田重行・三木亘（以上講師）・大岩川和正（誌上参加）・板垣雄三（司会）・青木正典・鎌田善和・工藤泰・倉員保海・駒崎一美・沢井啓一・新城紀雄・武信悦夫・寺島恵美子・中山康子・針生千絵・阪東淑子・藤井久子・前田豊司・村田幹雄・山部修子・山本光枝・吉岡力・吉田悟郎
- 07 【書評】「謝世輝『新しい世界史の見方：ユーラシア文明の視点から』」, 『歴史教育研究』56, pp.70~71
 【短文】「編集後記」, 同上『歴史教育研究』56, p.72
- 08 【書評】「西島有厚著『原爆はなぜ投下されたか：日本降伏をめぐる戦略と外交』」, 『歴史評論』292, 歴史科学協議会, pp.45~48
- 12 【解説】「解説」, 江口朴郎『江口朴郎著作集3 現代における平和と社会主義』, 青木書店, pp.241~253
- 12 【座談会】「朝鮮史の主体的発展：とくに近代以前について」, 『歴史教育研究』57, pp.2~21 ※出席者：木村誠・鈴木亮・奈良和夫・旗田巍・矢沢康祐（以上講師）・荒井和子・石島紀之・江口朴郎・岡百合子・小名康之・尾鍋輝彦・梶原英一・河合佳枝・川崎新三郎・工藤泰・栗原純・小林隆夫・斎藤進・中村匡男・二谷貞夫・浜幸子・阪東淑子・菱刈隆永・山部修子・吉田悟郎・吉田夏生

1975年

- 03 【論文】「戦後世界史の展開」, 歴史学研究会編『現代歴史学の成果と課題4 ファシズム・統一戦線・社会主義』, 青木書店, pp.220~239
- 04 【座談会】「〈シンポジウム（その1）〉中世の封建支配と天皇：会員総会記念講演」, 『歴史教育研究』58, pp.2~22 * 同題の永原慶二講演 (pp.2~19), 討論は pp.19~22, 荒井は司会
 【短文】「編集後記」, 同上『歴史教育研究』58, p.66
- 08 【論説】「エルミタージュ美術館考」, 『茨城大学五浦美術文化研究所報』5, 同研究所, pp.27~36
- 09 【論説】「ユートピア物語と社会主義」, 『現代と思想』21 [特集 マルクス主義の現代的課題], 青木書店, pp.183~186
- 10 【論文】「太平洋戦争論」, 藤井松一編『日本史を学ぶ5 現代』, 有斐閣〈有斐閣選書〉, pp.190~203
- 11 【論文】「戦後変革と変革主体の世界認識」, 『歴史学研究』別冊特集 [歴史における民族の形成：1975年度歴史学研究会大会報告], pp.182~190 ※同年度大会・現代史部会「アジアの変革と「冷戦」体制の動揺」報告 ⇒『アジア』第Ⅲ部三
- 11 【随想】「梶井基次郎と共同湯」, 『歴史文学』4 [特集 戦後の歴史小説], 汐文社,

荒井信一著作目録

pp. 89～91

1976年

- 03 【短文】「編集後記」, 『歴史教育研究』59, p. 70
- 03 【監修】三省堂編修所編『コンサイス人名辞典 外国編』, 三省堂, 1158p ※共同監修者: 相田重夫・板垣雄三・岡倉古志郎・岡部広治・土井正興・野沢豊 ⇒改題改訂版(第2版に相当)『コンサイス外国人名事典』, 三省堂, 1985.12, 1253p ⇒『同』第3版, 三省堂, 1999.04, 1315p
- 05 【論文】「サンフランシスコ条約」, 矢田喜美雄編『昭和の戦後史2 暗転と従属』, 汐文社, pp.209～234 ⇒『アジア』第I部二
- 10 【論文】「天皇の戦争責任問題とアメリカ」, 藤原彰・松尾尊発編『論集現代史』, 筑摩書房, pp.361～386 ⇒『アジア』第I部三
- 11 【論説】「みのらなかった海外終戦工作」, 『昭和日本史8 終戦の秘録』, 暁教育図書, pp.58～63

1977年

- 03 【単著】『現代史におけるアジア: 帝国主義と日本の戦争責任』, 青木書店, 238p.
【論文】「戦後国際政治の動向」(第Ⅲ部一), 同上『現代史におけるアジア』, pp.156～185 *新稿
- 03 【概説】「戦後世界の動向」, 江口朴郎企画指導『日本と世界の歴史22 20世紀3 第二次世界大戦』, 学習研究社, pp.332～347 *「増補版第2刷」発行時に増補された論考, 同書初版は1971.06発行
- 03 【短文】「編集後記」, 『歴史教育研究』60, p. 表3
- 06 【随想】「鬼熊さん」, 『茨城大学学生新聞』52 (06.25), 茨城大学広報委員会, p.2

1978年

- 01 【時評】「四人組追放で解放感: 中国社会科学界の実情」, 『朝日新聞』01.11夕, p.5
- 02 【論説】「〈現代と学問〉2・11 建国記念日によせて: 強まる天皇主義イデオロギー 資本主義の危機の深まりの中で」, 『緑の旗』(02.10), 全日本学生寮自治会連合, p.4 *号数不詳
- 03 【随想】「友の遺したトランク」, 『龍爪: 旧制静岡同窓会報』27, 旧制静岡高等学校同窓会, pp.9～10
- 04 【論文】「原爆投下の歴史的背景」, 『歴史評論』336 [特集 核兵器禁止と歴史学: 国連軍縮特別総会にむけて], pp.3～11

- 05 【論文】「日本の南進とインド」, 大形孝平編『日本とインド』, 三省堂〈三省堂選書42〉, pp.111~129
- 05 【随想】「歴史学者の眼でみた中国:大慶油田,大寨,江青問題等について」,『新しいばらぎ』05.05 * 「市民自由大学第2回文化講座」記録
- 05 【書評】「井出義光著『南部 もう一つのアメリカ』 「北部の目」を通さずに」,『朝日新聞』05.08朝, p.9 ※無署名
- 05 【書評】「加藤文三著『昭和史歳時記』 季題絡ませた歴史入門」,『朝日新聞』05.15朝, p.9 ※無署名
- 05 【書評】「小牧近江著『種蒔くひとびと』 つきぬ人生と酒への愛」,『朝日新聞』05.22朝, p.9 ※無署名
- 05 【書評】「西川潤著『不確定時代の選択:80年代の世界秩序を求めて』 “第三の開国期” 基軸に」,『朝日新聞』05.29朝, p.9 ※無署名
- 06 【論説】「現代史と美意識の問題」,『歴史学研究』457 [特集 歴史研究と文学], pp.56~64
- 06 【書評】「斉藤孝著『戦間期国際政治史』 運動論的観点を導入:権力と民衆の対抗関係で捉える」,『図書新聞』108 (通号1425, 06.03), p.3
- 06 【書評】「大城立裕著『まぼろしの祖国』 沖縄文化存亡の危機感」,『朝日新聞』06.19朝, p.9 ※無署名
- 07 【書評】「ジョン・ディーン著『陰謀の報酬:ニクソン前大統領顧問の告発』, H・R・ハルデマン著『権力の終焉』 秘話織りませ内情暴露」,『朝日新聞』07.11朝, p.11 ※無署名
- 07 【書評】「野添憲治著『海を渡った開拓農民』 移民=棄民,綿密に実証」,『朝日新聞』07.17朝, p.9 ※無署名
- 07 【書評】「桑原武夫編『ブータン横断紀行』 未知の山々,未知の文化」,『朝日新聞』07.24朝, p.9 ※無署名
- 08 【書評】「上條宏之著『絹ひとすじの青春:『富岡日記』にみる日本の近代』 工女の新しいさと主体性」,『朝日新聞』08.14朝, p.9 ※無署名
- 08 【書評】「M・J・シャーウィン著『破滅への道程:原爆と第二次世界大戦』 投下に至る背景を解明」,『朝日新聞』08.21朝, p.9 ※無署名
- 09~10 【論文】「第二次世界大戦の終結と原爆投下の意味」上・下,『文化評論』209~210 [特集 八・一五と戦後の青春群像], 新日本出版社, pp.85~93/pp.86~95
- 09 【書評】「新藤謙著『土と修羅』 感動的な混沌夫妻の姿」,『朝日新聞』09.17朝, p.11 ※無署名
- 09 【書評】「H・R・トレヴァー=ローパー著『宗教改革と社会変動』 ウェーバー批判し明

荒井信一著作目録

- 快], 『朝日新聞』 09.24 朝, p.9 ※無署名
- 10 【書評】「ロバート・カイザー著『ソ連のなかのロシア』第1・2部 庶民の姿を事実で紹介」, 『朝日新聞』 10.08 朝, p.9 ※無署名
- 10 【書評】「野原四郎著『中国革命と大日本帝国』 民衆運動の智恵を評価」, 『朝日新聞』 10.15 朝, p.9 ※無署名
- 10 【書評】「本間長世著『アメリカ政治の潮流』 転換期迎えた背景に光」, 『朝日新聞』 10.22 朝, p.9 ※無署名
- 10 【書評】「宮川寅雄・関野雄・長広敏雄編『中国文明の原像』上下 遺跡発掘の成果を通観」, 『朝日新聞』 10.29 朝, p.9 ※無署名
- 12 【書評】「伊東光晴・城塚登・判沢弘・山田宗睦編『戦後思想の潮流』「わが青春」を洗い直す」, 『朝日新聞』 12.10 朝, p.9 ※無署名
- 12 【書評】「入江昭著『日米戦争』 無責任な指導浮き彫り」, 『朝日新聞』 12.17 朝, p.9 ※無署名
- 12 【書評】「ミカエル・ロストフツェフ著『隊商都市』 感性ゆたかに古代の姿」, 『朝日新聞』 12.24 朝, p.9 ※無署名

1979年

- 01 【書評】「宇都宮徳馬著『アジアに立つ』 反官僚貫く風貌きざむ」, 『朝日新聞』 01.28 朝, p.9 ※無署名
- 01 【書評】「袴田里見著『私の戦後史』『昨日の同志 宮本顕治へ』 中ソ絡みの秘話も登場」, 『朝日新聞』 01.28 朝, p.9 ※無署名
- 02 【書評】「ロイ・メドヴェージェフ著『ソ連における少数意見』 異論派の苦悩を率直に」, 『朝日新聞』 02.04 朝, p.9 ※無署名
- 02 【書評】「秋山良照著『中国戦線の反戦兵士』 無口な鄧との出会いも」, 『朝日新聞』 02.04 朝, p.9 ※無署名
- 02 【書評】「高木惣吉写・実松讓編『海軍大将米内光政覚書』, 阿川弘之『米内光政 上・下巻』 曖昧さと人間的魅力と」, 『朝日新聞』 02.11 朝, p.9 ※無署名
- 02 【書評】「R・マクナリー, R・フロレスク著『ドラキュラ伝説』 歴史をたどって実像へ」, 『朝日新聞』 02.18 朝, p.9 ※無署名
- 02 【書評】「福島新吾著『日本の「防衛」政策』 文民統制に幅広い考察」, 『朝日新聞』 02.25 朝, p.9 ※無署名
- 03 【論文】「第二次世界大戦と三国同盟」, 木坂順一郎編『体系・日本現代史3 日本ファシズムの確立と崩壊』, 日本評論社, pp.133~169 ⇒山田朗・小田部雄次編『展望日本歴史22 近代の戦争と外交』, 東京堂出版, 2004.08

- 03 【随想】「別枝先生を偲んで」, 『歴史教育研究』62, pp.16~20
 【短文】「編集後記」, 同上『歴史教育研究』62, p.表3
- 03 【書評】「藤林伸治編『ドキュメント群馬事件』 新史料使い大胆な推論」, 『朝日新聞』
 03.18朝, p.9 ※無署名
- 04 【書評】「『日本社会運動人名辞典』を読んで: 民衆史の多様性浮き彫り」, 『朝日新聞』
 04.01朝, p.11
- 04 【書評】「齋辛著『鄧小平』 現実に即す「走資派」論」, 『朝日新聞』04.08朝, p.9 ※
 無署名
- 04 【書評】「金賛汀著『雨の慟哭』 歴史の暗部, 生々しく」, 『朝日新聞』04.15朝, p.9
 ※無署名
- 04 【書評】「青木美智男著『天保騒動記』 民衆生活に即した叙述」, 『朝日新聞』04.29朝,
 p.9 ※無署名
- 05 【書評】「黒田秀俊著『昭和軍閥』 回想まじえ指導者批判」, 『朝日新聞』05.06朝, p.9
 ※無署名
- 05 【書評】「大塚一男著『誤判と再審』・後藤昌次郎著『冤罪』 司法行政の問題点つく」,
 『朝日新聞』05.13朝, p.9 ※無署名
- 05 【書評】「〈新刊抄〉平沢貞通著『遺書 帝銀事件』」, 『朝日新聞』05.20朝, p.13 ※無
 署名
- 05 【書評】「川原衛門著『追跡 安藤昌益』 異端思想家の謎に迫る」, 『朝日新聞』05.27朝,
 p.11 ※無署名
- 05 【書評】「百瀬宏著『ソビエト連邦と現代の世界』 二面性外交の根底探る」, 『朝日新聞』
 05.27朝, p.11 ※無署名
- 06 【書評】「中村智子著『横浜事件の人びと』 新たな証言で真相究明」, 『朝日新聞』06.10
 朝, p.11 ※無署名
- 06 【書評】「貝塚茂樹著『中国古代再発見』 発掘の成果から見直し」, 『朝日新聞』06.17
 朝, p.11 ※無署名
- 07 【書評】「青木英五郎著『逃げる裁判官』・『日本の刑事裁判』 生きた人間見失う土壤」,
 『朝日新聞』07.01朝, p.11 ※無署名
- 07 【書評】「儀間進著『琉球弧・沖縄文化の模索』 土着の論理求める努力」, 『朝日新聞』
 07.15朝, p.11 ※無署名
- 07 【書評】「金達寿・姜在彦・李進熙・姜徳相著『教科書に書かれた朝鮮』 日本人に耳の
 痛い指摘」, 『朝日新聞』07.15朝, p.11 ※無署名
- 08 【書評】「立花雄一著『評伝 横山源之助』 自ら歴史の裏面生きる」, 『朝日新聞』08.07
 朝, p.11 ※無署名

荒井信一著作目録

- 08 【書評】「アダム・B・ウラム著『膨張と共存』①②③ ソ連側から冷戦を分析」, 『朝日新聞』08.07朝, p.11 ※無署名
- 08 【書評】「〈新刊抄〉 絲屋寿雄著『日本社会主義運動思想史』」, 『朝日新聞』08.12朝, p.13 ※無署名
- 08 【書評】「〈新刊抄〉 鈴木市蔵著『証言 2・1ゼネスト』」, 『朝日新聞』08.19朝, p.13 ※無署名
- 08 【書評】「大江志乃夫著『戦争と民衆の社会史』 抑圧された農民の実態」, 『朝日新聞』08.26朝, p.11 ※無署名
- 08 【書評】「〈新刊抄〉 ディーン・アチソン著『アチソン回顧録』」, 『朝日新聞』08.26朝, p.13 ※無署名
- 09 【座談会】「大学入試制度の改善を求めて：共通一次試験と高校教育」, 『歴史教育研究』63, pp.2~22 ※出席者：赤松儀彦・池永二郎・草川剛人・清水勝太郎・高橋賢吉・中村匡男・平野良一・吉村徳蔵
- 【短文】「編集後記」, 同上『歴史教育研究』63, p.表3
- 09 【概説】「〈指導用補助資料〉 独ソ戦」, 『世界史シリーズ』120, 帝国書院 *帝国書院発行『高等世界史（三訂版）』第Ⅱ部第3項「現代の世界」・『新世界史（三訂版）』第9章「現代世界の成立と展開」の指導用資料, 頁数なし
- 09 【書評】「前田哲男著『棄民の群島』 核との全面対決を説く」, 『朝日新聞』09.02朝, p.11 ※無署名
- 09 【書評】「ロベール・ギラン著『日本人と戦争』 大戦通し独特の文明論」, 『朝日新聞』09.02朝, p.11 ※無署名
- 09 【書評】「〈えつらん室〉 家永三郎教授東京教育大学退官記念論集刊行委員会編『古代・中世の社会と思想』など三巻」, 『朝日新聞』09.09朝, p.25
- 09 【書評】「歴史学研究会編集『帝国主義の時代 アジア現代史1』 ダイナミックな叙述：「世界分割」をアジアの側から有機的に捉える」, 『週刊読書人』1298 (09.17), p.4
- 09 【書評】「ジョン・エマーソン著『嵐のなかの外交官』 知日派の鋭い人間観察」, 『朝日新聞』09.23朝, p.11 ※無署名
- 09 【書評】「佐々木潤之介著『世直し』 豊富な実例をあげ構成」, 『朝日新聞』09.23朝, p.11 ※無署名
- 09 【書評】「ウェルナー・マーザー著『ニュルンベルク裁判』 西独史家の詳細な考察」, 『朝日新聞』09.30朝, p.11 ※無署名
- 10 【書評】「神田文人著『日本の統一戦線運動』 各時期の可能性を考察」, 『朝日新聞』10.14朝, p.11 ※無署名
- 10 【書評】「黒羽清隆著『十五年戦争史序説』 戦死の実態から全体像」, 『朝日新聞』10.21

- 朝, p.11 ※無署名
- 11 【随想】「別枝先生を偲んで」, 別枝達夫『海事史の舞台』, みすず書房, pp.303~310
- 11 【書評】「若槻泰雄著『シベリア捕虜収容所』上下 体験記の総和に終わる」, 『朝日新聞』11.04朝, p.11 ※無署名
- 11 【書評】「ゲルハルト・ヘルム著『ケルト人』 推理も駆使, 実体に迫る」, 『朝日新聞』11.25朝, p.11 ※無署名
- 12 【書評】「新島淳良著『さらばコミュニン』 愛の文に託す山岸会論」, 『朝日新聞』12.02朝, p.11 ※無署名
- 12 【書評】「井手文子著『自由 それは私自身』 実感に生きた女へ共感」, 『朝日新聞』12.09朝, p.11 ※無署名
- 12 【書評】「福田茂夫著『第二次大戦の米軍事戦略』 戦略の選択過程追求」, 『赤旗』12.24, p.10

1980年

- 02 【論文】「「ゲルニカ」覚書」, 『一橋論叢』83-2 (通号472) [特集 原爆・戦争体験と想像力: 石田忠名誉教授記念号], 一橋大学一橋学会, pp.212~230
- 02 【解説】「世界史」, 『朝日年鑑1980年版』, 朝日新聞社, p.570 * 「人文科学-史学」の一項目
- 02 【書評】「G・ボッフア著『ソ連邦史1』 労・農の関係を主題に」, 『朝日新聞』02.03朝, p.11 ※無署名
- 02 【書評】「丸沢常哉著『新中国建設と満鉄中央試験所』 復興に注ぐ研究の成果」, 『朝日新聞』02.03朝, p.11 ※無署名
- 02 【書評】「西川潤著『国際関係を見る眼』1・2・3 南側要求から新秩序へ」, 『朝日新聞』02.17朝, p.11 ※無署名
- 03 【論文】「課題と方法」・「原爆投下と平和の問題」, 『原爆被害の全体像に関する実証的研究 その1 昭和54年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書』, pp.3~9 * 「I 核兵器廃絶運動の世界史的・人間的意味」第一・二節
- 03 【書評】「〈図書紹介〉 梶井渉著『朝鮮語を考える』」, 『歴史教育研究』64, pp.47~49
【短文】「編集後記」, 『歴史教育研究』64, p.53
- 03 【書評】「ズボンコ・シタウプリンゲル著『チトー・独自の道』 ソ連へ冷静な対応ぶり」, 『朝日新聞』03.02朝, p.11 ※無署名
- 03 【書評】「加藤九祚著『シベリア記』 淡々と抑留生活を語る」, 『朝日新聞』03.16朝, p.11 ※無署名
- 04 【書評】「田中宏著『日本のなかのアジア』 人権認められぬ外国人」, 『朝日新聞』04.06

荒井信一著作目録

- 朝, p.11 ※無署名
- 04 【書評】「萱野茂著『アイヌの碑』 言葉奪われた民族の心」, 『朝日新聞』04.20朝, p.11 ※無署名
- 04 【書評】「G・リヒトハイム著『帝国主義』 2000年の歴史をふまえ考察」, 『朝日新聞』04.20朝, p.11 ※無署名
- 05 【書評】「種村季弘著『ヴォルプスヴェーデふたたび』 芸術村を侵す時代の毒」, 『朝日新聞』05.04朝, p.11 ※無署名
- 05 【書評】「鈴木明著『コリヌスはなぜ死んだか』 対独協力の汚名と女優」, 『朝日新聞』05.04朝, p.11 ※無署名
- 05 【書評】「遠山茂樹ほか編『山辺健太郎・回想と遺文』 魅力ある反骨の人間像」, 『朝日新聞』05.18朝, p.11 ※無署名
- 05 【書評】「上田誠吉著『ある内務官僚の軌跡』 父親にみた特高の生態」, 『朝日新聞』05.25朝, p.11 ※無署名
- 06 【論文】「朝鮮戦争の世界史的意義：NSC68を中心として」, 『歴史評論』362 [特集 朝鮮戦争の史的究明], pp.2~22
- 06 【書評】「松尾太郎著『アイルランド問題の史的構造』 複雑な要因細かく分析」, 『朝日新聞』06.02朝, p.13 ※無署名
- 06 【書評】「大島清次著『ジャポニズム』 仏芸術の創造的な源泉」, 『朝日新聞』06.16朝, p.12 ※無署名
- 06 【時評】「非同盟・中立と集団安全保障の思想」, 『赤旗』06.20, p.10
- 06 【書評】「郡山吉江著『冬の雑草』 貧乏と闘った女の一生」, 『朝日新聞』06.23朝, p.13 ※無署名
- 06 【書評】「〈よみもの〉江藤淳編『終戦を問い直す』 「指導者の視点」に限界」, 『朝日新聞』06.29朝, p.26 ※署名「荒」
- 06 【書評】「太田典禮著『ここをわが家とおぼえしか』 前向きに生きた獄中記」, 『朝日新聞』06.30朝, p.13 ※無署名
- 07 【書評】「渡辺金一著『中世ローマ帝国』 諸民族の動きとらえる」, 『朝日新聞』07.14朝, p.13 ※無署名
- 07 【書評】「柴田敏夫ほか編『ファシズムの現在』 潜在的可能性をさぐる」, 『朝日新聞』07.28朝, p.13 ※無署名
- 08 【随想】「西安郊外の陵」, 『健康』 *掲載号・頁数等不詳
- 08 【書評】「ゴードン・トマスほか著『エノラ・ゲイ』 原爆投下側の人間模様」, 『朝日新聞』08.05朝, p.12 ※無署名
- 08 【書評】「江口朴郎著『世界史における現在』 現代をきりひらく展望」, 『朝日新聞』

- 08.11 朝, p.12 ※無署名
- 08 【書評】「〈よみもの〉相沢忠洋著『赤土への執念』 人間くさい学問的研究」, 『朝日新聞』08.17 朝, p.26 ※署名「荒」
- 08 【書評】「永畑道子著『野の女』 明治と今と, 史料に限界」, 『朝日新聞』08.25 朝, p.13 ※無署名
- 09 【書評】「ニコラエ・ストイチェスク著『ドラキュラ伯爵のこと』 史伝で追う英雄の実像」, 『朝日新聞』09.01 朝, p.12 ※無署名
- 09 【書評】「〈えつらん室〉木戸日記研究会編『木戸幸一日記 東京裁判期』」, 『朝日新聞』09.08 朝, p.13
- 09 【書評】「ニーナ・カンディンスキー著『カンディンスキーとわたし』 夫の画業にも深い理解」, 『朝日新聞』09.22 朝, p.12 ※無署名
- 10 【短文】「〈巻頭言〉モノで示される歴史教育」, 『歴史教育研究』65, p.1
- 10 【書評】「ロストーノフ編『ソ連から見た日露戦争』 戦局左右した人民大衆」, 『朝日新聞』10.06 朝, p.13 ※無署名
- 10 【書評】「安良城盛昭著『新・沖縄史論』 新視点から通説を批判」, 『朝日新聞』10.13 朝, p.13 ※無署名
- 10 【書評】「〈よみもの〉檜山良昭著『ヒトラーの陰謀』 独国会放火事件を検証」, 『朝日新聞』10.26 朝, p.26 ※署名「荒」
- 10 【書評】「河村錠一郎著『ビアズリーと世紀末』 美学と文芸の臨床報告」, 『朝日新聞』10.27 朝, p.12 ※無署名
- 11 【書評】「スミルノーフ, ザイツェフ著『東京裁判』 ソ連側から全体像再現」, 『朝日新聞』11.11 朝, p.13 ※無署名
- 11 【書評】「池田浩士著『抵抗者たち』 反ナチス運動の全体像」, 『朝日新聞』11.17 朝, p.13 ※無署名

1981年

- 01 【書評】「奥野保男著『非同盟：新しい世界への展望』・土生長穂著『戦後世界政治と非同盟』 世界史的役割の認識のため歴史と現状を概観」, 『赤旗』01.12, p.7
- 01 【随想】「〈新春随想〉鶏を抱く少女」, 『新しいばらぎ』01.16 ※掲載号・頁数等不詳
- 01 【書評】「池上忠治著『フランス美術断章』 素人にも読める美術書」, 『朝日新聞』01.19 朝, p.13 ※無署名
- 02 【共編】『歴史学への旅立ち』上・下, 三省堂 [三省堂選書80・81], 上182p.・下212p.
※共編者：歴史教育研究所・吉村徳蔵
- 【解説】「昭和史学界の回顧：解説にかえて」, 同上『歴史学への旅立ち』上, pp.1~8

荒井信一著作目録

- 02 【書評】「ル・ロワ・ラデュリ著『新しい歴史：歴史人類学への道』 アナール派理解に格好」, 『朝日新聞』02.02朝, p.12 ※無署名
- 02 【書評】「磯崎康彦著『亜欧堂田善の研究』 蘭書手探り独創の域へ」, 『朝日新聞』02.02朝, p.12 ※無署名
- 02 【書評】「大江志乃夫著『徴兵制』 歴史を通じ違憲性論証」, 『朝日新聞』02.09朝, p.12 ※無署名
- 02 【書評】「中山公男著『モローの竖琴』 絵画史, 大胆な組み替え」, 『朝日新聞』02.23朝, p.13 ※無署名
- 04 【論文】「占領下の対アジア経済政策の方向づけ」, 中岡三益編『戦後日本の対アジア経済政策史〈研究双書301〉』, アジア経済研究所, pp.81~102
- 04 【書評】「フィリップ・トインビー編／大西洋三ほか訳『回想のスペイン戦争』」, 『歴史教育研究』66, pp.48~50
- 08 【翻訳】アンソニー・ブランド著『ピカソ〈ゲルニカ〉の誕生』, みすず書房, 109p.
*原著: Anthony Blunt, *Picasso's 'Guernica'*, Oxford University Press, London, 1969.
【解説】「ゲルニカ: 歴史と象徴」, 同上『ピカソ〈ゲルニカ〉の誕生』, pp.65~106
- 09 【時評】「故国に帰った「ゲルニカ」」, 『赤旗』09.15, p.11
- 11 【論文】「原爆投下と人種主義」, 日本現代史研究会編『日本ファシズム(1) 国家と社会』, 大月書店, pp.197~219
- 12 【座談会】「〈研究会〉ゆたかな中世史像をもとめて」, 『歴史教育研究』67, pp.25~52
*出席者: 池永二郎・矢代和也・芥川龍男・久保明生・中村匡男・長坂伝八・平野良一・星野良作・峰岸純夫・三好洋子・村川幸三郎・渡辺岩井・野田美都里・遠藤久美子

1982年

- 01 【論文】「戦争体験とファシズム: ヨーロッパにみる戦争の「聖化」の試み」, 『季刊 科学と思想』43, 新日本出版社, pp.509~525
- 01 【短文】「1981年読書アンケート」, 『みすず』257, みすず書房, p.44
- 02 【論説】「1930年代の世界」, 『教室の窓 東書 中学社会』, 東京教育研究所編／東京書籍発行, pp.8~9 *未見, 号数不詳
- 03 【随想】「国家の至上命令の前で」, 旧制静岡高等学校同窓会編・発行『青春奏つへし: 官立静岡高等学校六十周年記念編纂』, pp.471~474
- 04 【論説】「原爆と「科学者の社会的責任」の問題」, 『歴史学研究』503, pp.65~68 *リレー討論「戦後歴史学と平和の問題」9
- 04 【書評】「民衆史の視点を軸: 完結した『資料 日本現代史』」, 『朝日新聞』04.12朝, p.12

- 08 【書評】「昭和史叙述の傾向：民心の動き念頭に／戦争支えた側面も指摘」, 『朝日新聞』
08.09朝, p.8
- 11 【短文】「1982年度大会によせて」, 『歴史学研究』別冊特集「民衆の生活・文化と変革
主体：1982年度歴史学研究会大会報告」, p.1
- 12 【論説】「歴史家はなぜ“侵略”にこだわるか」, 歴史学研究会編『歴史家はなぜ“侵略”
にこだわるか』, 青木書店, pp.5～11
- 12 【論説】「歴研50周年によせて」, 『歴史学研究』511[創立50周年記念], pp.2～6, 18
- 12 【談話】「国民が求める歴史像づくり 創立50周年を迎える歴研委員長 荒井信一氏」,
『図書新聞』331(通号1648, 12.11), p.2
- 12 【論説】「科学的歴史学の創造めざし：歴史学研究会創立50年に」, 『赤旗』12.24, p.10
- 12 【座談会】「〈研究会〉教科書における「侵略」と「進出」の背景」, 『歴史教育研究』69,
pp.2～18 ※出席者：吉村徳蔵・図師尚幸・大江一道・中村匡男・奥田晴樹・鈴木亮
【座談会】「〈研究会〉1920年代の文化と大衆」, 同上『歴史教育研究』69, pp.19～43
※出席者：松島栄一・池田孝江・大江一道・二谷貞夫・矢代和也

1983年

- 01 【短文】「年頭に当って」, 『歴史学研究 月報』277, pp.1～2
- 01 【短文】「1982年読書アンケート」, 『みすず』269, p.48
- 02 【書評】「川崎史学 半世紀の軌跡：刊行成った川崎庸之著作選集」, 『朝日新聞』02.14
朝, p.12
- 06 【論説】「歴史学と現代」, 『歴史学研究』517[特集 現代の歴史学：いま問われているこ
と, 問いかけること 歴史学研究会創立50周年記念連続講演会の記録], pp.26～33, 80
- 10 【書評】「依然関心の高いワイマール時代：政治史文化史二極分解どう解消」, 『朝日新
聞』10.10朝, p.12
- 11 【短文】「1983年度大会によせて」, 『歴史学研究』別冊特集「東アジア世界の再編と民
衆意識：1983年度歴史学研究会大会報告」, p.1

1984年

- 01 【書評】「F.カストロ著『カストロの提言』 独自の世界経済白書：第三世界の強烈な
“自覚”示す」, 『図書新聞』385(通号1702, 01.21), p.3
- 02 【論説】「天皇制はまもられた：戦争終結処理と天皇制」, 『歴史地理教育』363[特集 十
五年戦争と天皇制], pp.16～25
- 02 【随想】「ヒトラーの侍医の秘密日記」, 『健康』, pp.28～29 ※発行者・号数等不詳
- 03 【講演】「教科書検定と歴史の偽造」, 『国民文化』292, 国民文化会議, pp.2～7 ※文

荒井信一著作目録

- 責：編集部 * 「軍事大国化に反対し思想・良心の自由を守る2・11集会」(1984.02.11)
講演
- 05 【単著】『ミニ世界史：日付が語るこの100年』, 社会思想社, 254p. * 『朝日新聞』
1979.01~1983.05, 毎週金曜日夕刊3面「にゅうす・らうんじ」欄掲載の500字連載コラ
ム「ミニ世界史」をもとにしたもの(当時の署名は「荒」)
- 07 【論説】「大台城址の保存について」, 『歴史学研究 月報』295, pp.1~3
- 08 【単著】『ビジュアル版世界の歴史19 第二次世界大戦』, 講談社, 261p.
- 08 【論文】「教科書検定と無条件降伏論争」, 『歴史学研究』531 [小特集 1980年代の教科
書検定と第三次訴訟], pp.13~24
- 10 【翻訳】シーダ・シャピロ著『画家たちの社会史：ヨーロッパのアヴァン・ギャルド
1900~1925』三省堂, 314p. * 原著：Theda Shapiro, *Painters and politics: the Europe-
an avant-garde and society, 1900-1925*, Elsevier, N.Y., 1976.
- 【短文】「訳者あとがき」, 同上『画家たちの社会史』, pp.274~275
- 10 【短文】「1984年度大会によせて」, 『歴史学研究』534 (増刊号) [都市民衆の生活と変
革意識：1984年度歴史学研究会大会報告], p.1
- 11 【随想】「編集会議は高橋歴史教室」, 『高橋碩一著作集 月報』5 (同著作集2付録), あ
ゆみ出版, pp.1~2
- 12 【短文】「〈巻頭言〉研究所の新活動方針」, 『歴史教育研究』70, p.1
- 【報告】「近代における「国民史」成立の思想的前提」, 同上『歴史教育研究』70, pp.2
~15
- 【座談会】「〈研究会〉近代における「国民史」成立の思想的前提」, 同上『歴史教育研
究』70, pp.15~26 ※出席者：大江一道・吉田悟郎・吉村徳蔵・二谷貞夫・小林克則・
鈴木亮・阪東淑子・鬼頭明成

1985年

- 01 【短文】「年頭所感」, 『歴史学研究 月報』301, 1985.01, pp.1~2
- 03 【書評】「茨城県史 近現代編 脈々伝わる県民運動：115年の歩み, 総合的に叙述」,
『いはらき』03.18, p.10 *号数・発行者等不詳
- 04 【書評】「正村公宏著『戦後史』上下 時代の規定性に注意：政治勢力を率直に批判」,
『朝日新聞』04.08朝, p.12
- 08 【論説】「戦争のおわらせ方と戦後史の課題」, 『歴史地理教育』385 [特集 敗戦40年：
語りつぐそれぞれの戦後史], pp.10~13
- 10 【論文】「激動する世界と日本の選択」, 歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史
12 現代2』東京大学出版会, pp.323~359

- 10 【論説】「世界史のなかのヒロシマ・ナガサキ」, 『ヒロシマ・ナガサキの証言』16 (1985・秋) [特集 ヒロシマ・ナガサキ40年:その意義と課題], 広島・長崎の証言の会, pp.14~18
- 10 【短文】「1985年度大会によせて」, 『歴史学研究』547(増刊号) [民衆の「平和」と権力の「平和」:1985年度歴史学研究会大会報告], p.1
- 11 【単著】『原爆投下への道』, 東京大学出版会, 281p.
- 11 【論文】「原爆スパイ事件・人類的価値と国家的価値」, 藤原彰・雨宮昭一編『現代史と「国家秘密法」』, 未来社, pp.66~84

1986年

- 01 【座談会】「〈会員総会記念シンポジウム〉三笠宮崇仁著「古代オリエント史と私」をめぐって」, 『歴史教育研究』71, pp.2~17 ※発言者:三笠宮崇仁・佐藤伸雄・畑守泰子・吉村徳蔵・大江一道・菱刈隆永・土井正興・石内信子
【講演】「太平洋戦争の終結と空襲」, 同上『歴史教育研究』71, pp.18~31 *法政二高教養学校開校記念講演(1985.05.18)
- 01 【短文】「年頭所感」, 『歴史学研究 月報』313, pp.1~3
- 03 【論説】「日本はほんとうに「無条件」降伏したのか」, 『歴史地理教育』395 [3月臨時増刊号 歴史教育ハンドブック 教室の常識を問う日本史50問50答], pp.112~113
- 08 【論説】「刊行にあたって」, 歴史学研究会編『天皇と天皇制を考える〈歴研アカデミー1〉』, 青木書店, pp.3~8
- 11 【書評】「大沼保昭著『東京裁判から戦後責任の思想へ』」, 『平和研究』11, 日本平和学会, pp.184~186
- 11 【事典】「昭和史論争」, 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』7, 吉川弘文館, p.663
- 12 【随想】「歴研と私の現代史事始」, 『歴史学研究 戦後第I期 復刻版 月報』2, 青木書店, pp.3~4
- 12 【随想】「思い出の秘湯」, 『健康』, p.10 *掲載号等不詳

1987年

- 01 【講演】「核を使う者となくす者」, 『茨城近代史研究』2, 茨城の近代を考える会, pp.3~18 *定期総会記念講演(1986.06.21)
- 03 【随想】「金沢さんの思い出」, 『学習院史学』25 [金沢誠先生退職記念号], pp.9~11
- 06 【座談会】「『妻たちの二・二六事件』から『記録 ミッドウェー海戦』まで:澤地久枝氏をかこんで」, 『歴史学研究』568 [特集 オーラル・ヒストリー:その意味と方法と現在], pp.28~50 ※出席者:吉沢南(司会)・澤地久枝・江口圭一・米田佐代子 ⇒改題「歴

荒井信一著作目録

史のディテール，歴史の現場：澤地久枝をかこんで，歴史学研究会編『事実の検証とオーラル・ヒストリー：澤地久枝の仕事をめぐる（歴研アカデミー4）』，青木書店，1988.11，pp.3～55

- 08 【時評】「ゲルニカ爆撃から50年：歴史の歩みをおそれるものたち」，『赤旗』08.26，p.10

1988年

- 03 【座談会】「〈歴史よもやま話〉金沢誠先生と囲んで」，『歴史教育研究』73，pp.2～17
※出席者：三木亘・大江一道・池田孝江・野田美都里・大橋登代子
- 07 【単著】『日本の敗戦〈シリーズ昭和史8〉』，岩波書店〔岩波ブックレット〕，62p.
- 08 【対談】「対論 歴史家の戦争責任をめぐる」，『歴史評論』460〔特集 戦争責任〕，pp.78～93 ※対談者：平田哲男
- 11 【論文】「戦争体験とオーラル・ヒストリー」，歴史学研究会編『事実の検証とオーラル・ヒストリー：澤地久枝の仕事をめぐる（歴研アカデミー4）』，青木書店，pp.93～124
- 00 【論説】「黎明期の世界史論：白鳥庫吉とスイントン」，『高校社会科教育ブックレット』13，三省堂，pp.15～28 *未見

1989年

- 06 【論文】「天皇の戦争責任問題とアジア」，『史海』36，東京学芸大学史学会，pp.1～11
*同学会新春講演会（1989.01.27）での同題講演にもとづく

1990年

- 03 【論文】「脱植民地化と西欧社会の変動」，「ヨーロッパ諸国の産業構造と文化的伝統」研究会編『ヨーロッパ社会の変動と伝統：1988年度特定研究報告書』，茨城大学人文学部1988年度特定研究委員会，pp.1～15 *上記特定研究「ヨーロッパ諸国の産業構造と文化的伝統の相互連関に関する研究」の報告書
- 07 【共編】藤原彰・荒井信一編『現代史における戦争責任：現代史シンポジウム』，青木書店，266p.
【論文】「戦争責任と戦後処理」，同上『現代史における戦争責任』，pp.24～53
- 09 【共編】『日本同時代史1 敗戦と占領』，青木書店，344p. ※共編者：粟屋憲太郎，叢書全体は歴史学研究会編
【概説】「序 日本敗戦と戦後世界」・「I 日本降伏への道」，同上『日本同時代史1 敗戦と占領』，pp.3～23, 25～47

- 12 【論説】「目標はつねに日本である：原爆投下と人種偏見」, 『歴史読本』 35-21 (通号 536) 臨時増刊 [特集 “鬼畜米英” : 秘められた日米関係史], pp. 88~95

1991年

- 01 【単著】『ゲルニカ物語：ピカソと現代史』, 岩波書店〈岩波新書：新赤版155〉, 214p.
- 02 【談話】「〈著者訪問〉荒井信一さん『ゲルニカ物語：ピカソと現代史』」, 『毎日新聞』 02.04朝, p. 11
- 03 【単著】『世紀史を伝える』, 同時代社, 231p.
- 03 【随想】「江口さんと現代史研究」, 江口朴郎先生追悼集編集委員会『思索する歴史家・江口朴郎：人と学問』, 青木書店, pp. 244~257
- 04 【編著】『週刊朝日百科 世界の歴史124 20世紀の世界2 生活25 兵士と銃後』(通号 796, 04.21), 朝日新聞社, 32p.
- 【論説】「総力戦と民衆」, 同上『兵士と銃後』, p. 770 * 図版解説も担当
- 【論説】「兵士たちの戦争体験：戦場における人格の破壊」, 同上『兵士と銃後』, pp. 772~775
- 【短文】「戦場の顔」, 同上『兵士と銃後』, pp. 784~775
- 04 【随想】「私と考古学」, 『博古研究』1, 博古研究会, pp. 43~47
- 05 【論説】「世界史的にみて日本降伏とは何であったか」, 佐々木隆爾編『争点 日本の歴史 6 近・現代編(幕末~第二次大戦後)』, 新人物往来社, pp. 170~181
- 05 【随想】「数年ぶりの八方尾根」, 『踏高会通信』2, 成蹊学園踏高会事務局, pp. 1~2
* 荒井は同高校山岳部元顧問, 同会特別会員
- 06 【論説】「「戦勝」が与えた夢と失望：アジアと日本の進路に与えた影響〈日露戦争と明治の日本3〉」, 『日露戦争：陸海軍, 進撃と苦闘の五百日(歴史群像シリーズ24)』, 学習研究社, pp. 150~155
- 08 【書評】「山崎正勝・日野川静枝編著『原爆はこうして開発された』」, 『歴史評論』496, pp. 93~95
- 09 【論説】「ピカソとゲルニカ：スペインの民主化が帰還の条件」, 『毎日グラフ別冊 スペイン美術の旅：七人の巨匠の風土を訪ねて』, 毎日新聞社, pp. 94~97
- 11 【随想】「教科書裁判と関特演」, 『遠山茂樹著作集 月報』1 (第1巻付録), 岩波書店, pp. 4~7
- 12 【論説】「大西洋憲章とハル・ノート：憲法第九条の出発点」, 『赤旗』12.07, p. 9
- 12 【講演】「世界史のなかの真珠湾50年」1~5, 『長周新聞』4177~4181 (12.17~26) * 日本戦没学生記念会(わだつみ会)主催「'91 わだつみ会不戦の集い」(1991.12.01)講演要旨 * 文責：「本紙編集部」

1992年

- 03 【座談会】「〈研究会〉『ゲルニカ物語』（荒井信一著）をめぐって」、『歴史教育研究』75, pp.2~25（荒井談話 pp.2~12）※出席者：池田孝江・石出みどり・岩見寿子・榎本勝己・大江一道・大橋登代子・庄野蕙子・杉本雅士・野田美都里・福島直人・渡辺賢二
【随想】「さわやかな生き方とエスプリ」, 同上『歴史教育研究』75, p.28 * 「追悼 金沢誠先生：華麗なるフランス史と共に」中の一編
【随想】「四〇年の友人, 歴史事実を大切にした人」, 同上『歴史教育研究』75, p.30 * 「追悼 吉村徳蔵先生：民主的歴史教育に捧げた一生」中の一編

1993年

- 02 【時評】「過去の不正義を正すことこそ：日本の戦後補償に関する国際公聴会（12/9・10）から」, 『新しい世代』384, 朝鮮青年社, pp.40~43
- 05 【論説】「日ソ中立条約締結と関特演」, 安在邦夫・加藤友康・三宅明正・安田浩編『法廷に立つ歴史学：家永教科書論争と歴史学の現在』, 大月書店, pp.262~280 * 原本は, 第一次家永教科書訴訟において, 家永側弁護団より最高裁第3小法廷に提出された「上告理由補充書（八）」（1991.11.28）
- 05 【短文】「開会あいさつ」, 国際公聴会実行委員会編『世界に問われる日本の戦後処理 ①：「従軍慰安婦」等国際公聴会の記録』, 東方出版, pp.12~14 * 〈アジアの声〉第7集
- 06 【談話】「〈ひと〉なぜいま「日本の戦争責任資料センター」ですか」, 『朝日新聞』06.05朝, p.3 * 文責：松井覚進記者
- 09 【時評】「〈世界の潮〉驚くべき国立「平和祈念館」」, 『世界』586, 岩波書店, pp.88~91
- 09 【時評】「多国間調整を迫られる問題に発展：金銭的補償はごく一部にすぎない」, 『エコノミスト』71-41（通号3085, 09.28）[特集 戦後補償問題への視座], pp.44~47
- 09 【短文】「創刊の辞」, 『戦争責任研究』1, 日本の戦争責任資料センター, pp.2~3
- 10 【概説】「第二次世界大戦世界史」, 歴史教育者協議会編（鈴木亮責任編集）『あたらしい歴史教育1 世界史とは何か』, 大月書店, pp.59~81
- 10 【短文】「戦後補償国際公聴会の報告」, 日本弁護士連合会編『世界に問われる日本の戦後処理②：戦争と人権, その法的検討』, 東方出版, pp.111~113 * 荒井は「日本の戦後補償に関する国際公聴会」実行委員長
- 10 【随想】「敦煌を旅して」, 『博古研究』6, p.64 * 「第四次茨城大学比較文化論訪中記」中の一編, 短歌12首
- 11 【談話】「〈どうする日朝関係 私の直言 関係改善へ〉 補償問題を具体化すべき／戦争

- 責任は国際的問題], 『朝鮮時報』 2689 (11.15), 朝鮮新報社, p.1 ※文責:「編集部＝嶺」
- 12 【論説】「現代政治とジャーナリズム」, 『マスコミ市民』 301 [300号記念 私とマスコミ], pp.28～32
- 12 【随想】「韓国の人々の心の痛み」, 『リクルートキャリアガイダンス』 25-10 (通号291), リクルート, p.11

1994年

- 01 【編集】『戦争博物館』, 岩波書店〈岩波ブックレット328〉, 63p.
【論説】「戦没者追悼平和祈念館」を問う, 同上『戦争博物館』, pp.2～31
- 01 【翻訳】テオ・ファン・ボーベン著『ファン・ボーベン国連最終報告書:人権と基本的自由の重大な侵害を受けた被害者の原状回復,賠償および更生を求める権利についての研究』,日本の戦争責任資料センター,128p. *原著:国連・差別防止・少数者保護小委員会特別報告者テオ・ファン・ボーベンにより提出された最終報告書(E/CN.4/Sub2/1993/8),1993.07.02 Study concerning the right to restitution, compensation and rehabilitation for victims of gross violations of human rights and fundamental freedoms: final report submitted by Mr. Theo van Boven, Special Rapporteur, Commission on Human Rights.
【解説】「解説」,同上『ファン・ボーベン国連最終報告書』,pp.I～VI
- 01 【随想】「くずいひつ」捕虜の戦後史,『歴史読本』39-1(通号609),pp.30～31
- 02 【論文】「戦争責任とは何か:迫られる2つの戦後処理」,『世界』591[特集 白書・日本の戦争責任],pp.187～201
- 05 【時評】「平和祈念館にしがみつく厚生省と日本遺族会の意図」,『週刊金曜日』27(05.27)[特集 右傾化する日本],金曜日,pp.14～17
- 05 【講演】「戦後50年と戦争責任」,『国民文化』414,pp.5～7 *「1994年2・11集會 みんなで考えよう「憲法・天皇・日本の進路」(1994.02.11)講演,「質問とまとめの発言」欄にも発言の記録あり(p.11～12)
- 07 【論説】「戦争責任と人道・人権の問題」,『軍縮問題資料』164,宇都宮軍縮研究室,pp.18～23
- 07 【時評】「戦後五〇年,あらためて問う戦争責任問題の現状」,『JRU REPORT』59,全日本鉄道労働組合総連合会,pp.6～10
- 08 【論説】「戦争責任と「平和祈念館」問題」,歴史教育者協議会編『歴史教育・社会科教育年報1994年版 歴史教育の課題と現代』,三省堂,pp.116～125
- 08 【時評】「社会党の決意と力量が…」,『マスコミ市民』309[特集 社会党に明日はある

- か：社会党存亡論], 日本マスコミ市民会議, pp. 11~13
- 08 【時評】「戦後補償を考えるうえで今知っておかなければならないこと」, 『週刊金曜日』 38 (08.12) [特集 戦後補償は終わっていない], pp. 36~38
- 09 【論文】「帝国意識からの訣別を：戦争責任論の発展とその現在」, 『世界』 599 [特集 49 年目：歴史のなかの責任], pp. 68~80
- 09 【論説】「東京裁判史観とは何か」, 『歴史地理教育』 522, pp. 84~89
- 12 【論説】「〈1994年度大会報告批判〉特設部会 歴史博物館の現在と未来」, 『歴史学研究』 666, pp. 48~50,57
- 12 【談話】「〈佳話雅言〉日本の国家犯罪を追及する」, 『朝鮮画報』 33-12 (通号 400, 12.05), 朝鮮画報社, p. 64 *文責：玲

1995年

- 01 【談話】「日本の戦後補償：95年は「決算」ではなく「開始」です」, 『統一評論』 355, 統一評論新社, pp. 54~59 *文責：編集部
- 02 【論説】「戦後50年と戦争責任」, 「紀元節」問題連絡会議編『戦後50年 天皇制・軍事大国はいま』, 新興出版社, pp. 280~292
- 03 【講演】「戦争責任問題と人権」, 『比較法文化：駿河台大学比較法研究所紀要』 3, 同研究所, pp. 17~34 *同研究所公開講演 (1994.11.28)
- 03 【論説】「世界史から見た戦後史」, 歴史教育者協議会編『戦後史から何を学ぶか』, 青木書店, pp. 16~23
- 03 【時評】「日本は有条件降伏か, 無条件降伏か」, 『Let's』 6, 日本の戦争責任資料センター, p. 7
- 04 【時評】「〈歴史の眼〉村山内閣と「従軍慰安婦」問題」, 『歴史評論』 540, pp. 76~79
- 04 【短文】「序文」, ジュディ・フリーマン (福のり子訳)『ピカソと泣く女：マリー＝テレーズ・ワルテルとドラ・マールの時代』, 淡交社, pp. 10~11
- 04 【共編】『写真・絵画集成 子どもにつたえる世界の戦争と平和 [平和図書館]』全6巻, 草の根出版会編/日本図書センター発行 ※共編者：早乙女勝元・橋本進 (編集協力：山本耕二)
- 『1 あの日を語りつぐ』 198p., 『2 侵略の歴史をふりかえる』 206p., 『3 戦争のなかの民衆』 198p., 『4 大量虐殺：ホロコースト』 198p., 『5 冷たい戦争の時代』 199p., 『6 戦争と世界の子どもたち』 206p.
- 【短文】「刊行にあたって」, 同上『子どもにつたえる世界の戦争と平和』 1, pp. 2~5
- 【解説】「戦争のなかの民衆」, 同上『子どもにつたえる世界の戦争と平和』 3, pp. 184~198

- 【解説】「大量虐殺：ホロコースト」, 同上『子どもにつたえる世界の戦争と平和』4, pp.184~198
- 【解説】「冷たい戦争の時代」, 同上『子どもにつたえる世界の戦争と平和』5, pp.186~198
- 05 【講演】「日本の戦争責任」, 朝鮮人強制連行真相調査団編・発行『国連決議と植民地支配, 強制連行:1905年条約は無効, “慰安婦”問題は犯罪〈資料集8〉』, pp.2~8 *同調査団第3回全国交流集会記念講演(1994.05.14)
- 05 【随想】「半世紀に及ぶ付き合い」, 小澤圭介『戦争体験と歴史教育』, 新興出版社, pp.227~228
- 05 【随想】「藤平さんを偲ぶ」, 『追憶 藤平桓三先生追悼』, 同編集委員会編・発行, pp.10~12
- 07 【単著】『戦争責任論:現代史からの問い』, 岩波書店, 288p. ⇒岩波現代文庫:学術146, 2005.06, 346p.
- 07 【論説】「連合国は日本にどんな降伏を迫ったか」, 歴史教育者協議会編『100問100答・日本の歴史6 現代』河出書房新社, pp.10~12
- 08 【時評】Start with Human rights, *Japan Times*, 08.15, p.18
- 09 【談話】「〈テーブルトーク〉「戦争責任」の究明には資料の全面公開必要」, 『朝日新聞』09.30夕, p.13 *文責:「蚕」
- 10 【講演】「原爆投下と戦争責任」, 『平和文化研究』18, 長崎総合科学大学長崎平和文化研究所, pp.7~24
- 10 【談話】「〈こんにちはインタビュー〉荒井信一さんの「戦後50年代に思う」:崩れた, アメリカの世界支配正当化のための「原爆投下が平和をもたらした」の神話」, 『グラフ こんにちは 日本共産党です』249(10.15), 日本共産党中央委員会, pp.34~35 *目次では「崩れた「原爆投下で平和が」の神話」
- 11 【論文】「戦後補償と戦後責任」, 中村政則・天川晃・尹健次・五十嵐武士編『戦後日本占領と戦後改革5 過去の清算』岩波書店, pp.233~269 ⇒新装版, 岩波書店, 2005.09
- 11 【論文】「戦後50年と戦争責任」, 歴史学研究会編『戦後50年をどう見るか〈歴研アカデミー8〉』, 青木書店, pp.65~90
- 12 【談話】「荒井信一氏に聞く 世界史からみた第二次世界大戦」, 『歴史地理教育』541 [特集 世界史のなかの第二次大戦], pp.8~17 ※聞き手:土産田真喜男
- 12 【解説】「解題」, 竹島茂編『満州・朝鮮で敗戦を迎えたわたしたちの戦後』, STEP, pp.264~270
- 12 【随想】「歴研の戦後50年と私〈特集 随想・戦後50年10〉」, 『歴史学研究 月報』432, pp.1~2

- 12 【翻訳・解説】「〔従軍慰安婦問題〕：リンダ・チャベス氏報告」, 『戦争責任研究』 10, pp. 44~47 * 「解説」 p. 47
- 00 【論説】「〈95 提言〉十五年戦争から国際法を無視／捕虜政策にみるわが国の戦争責任問題」, 『連合通信・別冊 1995 年新年原稿特集号 (単産版)』, pp. 9~10 * 発行月等不詳

1996 年

- 01 【書評】「山上正太郎著『二つの世界大戦：サラエボからヒロシマまで』 20 世紀の「戦争と平和」を考察」, 『北海道新聞』 01. 17
- 01~04 【講演】「戦後 50 年と「従軍慰安婦」問題」 1~4, 『婦人通信』 442~443, 445~446, 日本婦人団体連合会, [442] pp. 25~27・[443] pp. 19~21・[445] pp. 18~20・[446] pp. 33~35 ※文責：編集部 * 「戦争はごめん 女性のつどい」(1995. 08. 11) 講演要旨
- 03 【翻訳】ラディカ・クマラスワミ『R. クマラスワミ国連報告書：人権委員会決議 1994/45 にもとづく「女性への暴力に関する特別報告者」による戦時の軍事的性奴隷制問題に関する報告書』, 日本の戦争責任資料センター, 83p. ※共訳者：戸塚悦朗 * 原書：Report of the special rapporteur on violence against women, its causes and consequences, Ms. Radhika Coomaraswamy, in accordance with Commission on Human Rights.
- 【解説】「解説」, 同上『R. クマラスワミ国連報告書』, pp. I ~ IV
- 06 【単著】『いま戦争責任を問う：侵略戦争でなかったという人たちの「歴史認識」』, 日本ジャーナリスト会議, 55p.
- 06 【論文】「第二次日韓協約の形式について：批准の問題を中心に」, 『戦争責任研究』 12 [特集 韓国併合合法論をめぐって], pp. 10~17
- 06 【時評】「〔戦争の世紀〕の残したもの」, 『Let's』 7, p. 1
- 07 【論文】「戦争と平和の思想」, 歴史学研究会編『講座世界史 12 わたくし達の時代』, 東京大学出版会, pp. 133~156
- 09 【論説】「戦後補償の道義と現実：次世代への責任」, 『軍縮問題資料』 190 [特集 戦争の後始末], pp. 8~13

1997 年

- 01 【論文】「〔従軍慰安婦〕問題と国連」, 『東京経大会誌』 201 [柴田高好教授退任記念号：国家をめぐる諸問題], 東京経済大学, pp. 103~118
- 02~03 【座談会】「中学歴史教科書の「従軍慰安婦」などの記述をめぐって、何が起きているか？」上・中・下, 『日中友好新聞』 1768~1770 (02. 15・02. 25・03. 05), 日本中国友好協会 ※出席者：笠原十九司・吉見義明 (文責：編集部)

- 03 【時評】「韓国国会議員の声明」, 『Let's』 14, p. 3
- 04 【監修】『写真・絵画集成 世界の「戦争と平和」博物館』全6巻, 日本図書センター, 各巻190p. ※共同監修: 早乙女勝元, 写真総責任: 山本耕二
『1 ポーランド・ドイツ』, 『2 フランス・オーストリア・オランダ・スペイン・イスラエル』, 『3 ロシア・ベラルーシ・ウズベキスタン・チェコ』, 『4 アメリカ・イギリス・オーストラリア・ナミビア』, 『5 中国・台湾・韓国・朝鮮・ベトナム・カンボジア・タイ・シンガポール』, 『6 日本』
【短文】「刊行にあたって」, 同上『世界の「戦争と平和」博物館』1, pp. 18~21
【解説】「戦争の記憶をどう伝えるか」, 同上『世界の「戦争と平和」博物館』2, pp. 183~190
【解説】「歴史の中の加害と被害」, 同上『世界の「戦争と平和」博物館』4, pp. 184~189
【解説】「戦争・平和博物館設立の歩み」, 同上『世界の「戦争と平和」博物館』6, pp. 182~189
- 06 【時評】「ILO と「慰安婦問題」」, 『歴史地理教育』564, pp. 56~57
- 06 【翻訳・解説】江美芬著「台湾人性奴隷被害者のトラウマに関する研究」, 『戦争責任研究』16, pp. 76~78 *解説 p. 76
- 07 【随想】「苛烈な青春」, 『歴史教育研究』79 [追悼 尾鍋輝彦先生/追悼 秀村欣二先生], p. 35
- 10 【随想】「西域の旅より」, 『博古研究』14, p. 55 *「第八次茨城大学比較文化論訪中記」中の一編, 短歌23首
- 11 【共編】『従軍慰安婦と歴史認識』, 新興出版社, 188p. ※共編者: 西野瑠美子・前田朗
【論説】「歴史をみつめることの意味: まえがきに代えて」, 同上『従軍慰安婦と歴史認識』, pp. 5~14
- 12 【論文】「戦後史の発展と人権: 台湾の事例を中心に」, 『歴史地理教育』571 [特集 20世紀の世界と人権], pp. 16~23

1998年

- 03 【時評】「731部隊とアメリカ人捕虜」, 『Let's』18, p. 3
- 04 【解説】「『戦争の惨禍』と子どもたち」, 山住正己監修『写真・絵画集成 救え! 世界の子どもたち1 戦火の中で』, 草の根出版界編/日本図書センター発行, pp. 185~190
- 07 【論文】「戦争を描いた画家たち」, 『五浦論叢: 茨城大学五浦美術文化研究所紀要』4, pp. 25~39
- 08 【書評】「大江志乃夫著『日本植民地探訪』」, 『山口新聞』08.24, p. 9 *時事通信社配

荒井信一著作目録

- 信記事, 『上毛新聞』 08.31 (p.29), 『神奈川新聞』 09.01 (p.20), 『デーリー東北』 09.04 (p.10), 『茨城新聞』 09.05 (p.9), 『鹿児島新報』 09.23 (p.11) にも掲載
- 10 【随想】「西嶋定生さんを偲ぶ」, 『博古研究』 16 [西嶋定生先生追悼号], pp. 5~6
【随想】「寧夏・甘肅紀行」, 同上『博古研究』 16, pp.49~50 * 「第九次茨城大学比較文化論訪中記」中の一編, 短歌 33 首
- 12 【時評】「ポーランドドイツ教科書委員会の 26 年」, 『Let's』 21, p.3

1999 年

- 06 【時評】「第三回世界平和博物館会議に参加して」, 『戦争責任研究』 24, pp.62~65
- 07 【論説】「ポツダム宣言受諾は無条件か? : 終戦の大問題」, 『歴史読本』 44-8 (通号 709) [シリーズ歴読専科 12 歴史を逆転する日本史の大問題], Kadokawa, pp.194~199
- 08 【随想】「〈現代史の扉〉戦後の諸論争と現代史研究」, 『年報・日本現代史 5 講和問題とアジア』, 現代史料出版, pp.227~241
- 08 【報告】「戦争責任と民族自決」, 3・1 独立運動シンポジウム実行委員会編『3・1 独立運動 80 周年を考える: 日韓の和解とアジアの平和』, pp.48~57 * 上記シンポジウム (08.27~28, 在日本韓国 YMCA) 配付資料集 ⇒同資料集に韓国語訳併載 (孫英玉訳, pp.58~67)
- 09 【論説】「真珠湾陰謀説」, 『戦争責任研究』 25 [小特集 十五年戦争をめぐる争点], pp.6~9
- 09 【論説】「和解 (RECONCILIATION) について」, 『戦争犯罪と戦後補償を考える国際市民フォーラム』プレ・フォーラム 第 1 回 真実・謝罪・和解について』レジュメ集, pp.1~2 * 09.25 開催
- 10 【随想】「雲崗, 龍門, 火車の旅」, 『博古研究』 18, p.74 * 「第十次茨城大学比較文化論訪中記」中の一編, 短歌 11 首
- 11 【論説】「総合講義 III 「日本人」」, 『駿河台大学論叢』 19, 駿河台大学教養文化研究所, pp.117~166 ※共著者: 内田康夫・信岡奈生・吉野瑞恵 * 荒井担当部分: 「第 5 章 日本人と外国人」 pp.161~166
- 12 【時評】「調査会法案と院内集会」, 『Let's』 25, p.3

2000 年

- 03 【報告】「現代史教育における戦争責任問題の取り上げ方」, 『立命館平和研究: 立命館大学国際平和ミュージアム紀要』 1 [特集 第 3 回世界平和博物館会議歴史教科書問題ワークショップ報告], pp.29~31
- 06 【論文】「アメリカ議会の対日真相究明法案について」, 『戦争責任研究』 28, pp.37~47

- * 付属資料1 ファインスタイン法案, 同資料2 1999年日本帝国軍情報公開法に関するファインスタイン上院議員の声明
- 06 【時評】「ashamed から disappointment まで」, 『Let's』27, p.3
- 07 【論説】「総合講義 III 「日本人」補遺」, 『駿河台大学論叢』20, pp.181~192 * 共著者: 内田康夫・信岡奈生・吉野瑞恵 * 荒井の直接署名のある担当部分はなし
- 09 【論文】「アメリカにおける強制労働集団訴訟: 請求権放棄とサンフランシスコ平和条約」, 『戦争責任研究』29, pp.38~46
- 10 【報告】「今なぜ, 真相究明なのか」, 『国際シンポジウム 戦争と紛争の世紀の終わりに—今なぜ, 真相究明なのか 資料集』, 同シンポジウム実行委員会(恒久平和調査局設置法成立をめざす市民ネットワーク事務局), pp.6~7 * 「基調報告」予稿
- 【時評】「ナチス戦争犯罪記録情報公開法の実施状況について」, 同上『国際シンポジウム 戦争と紛争の世紀の終わりに—今なぜ, 真相究明なのか 資料集』, pp.38~39
- 10 【随想】「赤沢さんの「時間」」, 古厩忠夫編『外伝 赤澤計真』, 同編集委員会(新潟大学人文学部古厩研究室), pp.56~57
- 11 【論説】「歴史における合法論, 不法論を考える: 日韓対話の試み」, 『世界』681, pp.270~284
- 11 【報告】「併合条約から日韓条約まで」, 『2000韓日文化SYMPOSIUM 「過去清算」と21世紀の日韓関係」, 韓日文化交流政策諮問委員会, pp.54~61 * シンポジウム(2000.11.04, ソウル)報告集 ⇒同報告集に韓国語訳併載(pp.45~53)
- 11 【随想】「自分史外伝10年」, 『駿河台大学論叢』21 [荒井信一教授 森本和夫教授 退職記念号], pp.巻頭6~23
- 12 【論説】「日本の戦争関連記録の情報公開について」, 『戦争責任研究』30 [特集 日独, 戦後補償問題の現状], pp.5~10
- 12 【談話】「客観的な研究を柱に」, 『読売新聞』12.26朝, p.15 * 記事全体のタイトルは「〈論陣・論客〉歴史教科書のあり方 藤岡信勝氏 vs 荒井信一氏」だが, 対談ではなく, 談話の併載

2001年

- 03 【翻訳・解説】「日本帝国政府記録情報公開法について」, 『戦争責任研究』31, pp.71~73 * 解説 p.71
- 03 【解説】「解説」, 『母と子でみる51 20世紀の戦争 日中戦争1』草の根出版会, pp.174~181 * 「母と子でみる」シリーズ51~55「20世紀の戦争」全5巻は, すべて「写真: 共同通信社, 解説: 荒井」。本シリーズは共同通信社が入手した米国のデーリーニューズ社の戦争写真コレクションによる。

- 03 【論説】「不十分な真相究明」, VAWW-NET Japan 調査・起訴状作成チーム編『日本軍性奴隷制を裁く「女性国際戦犯法廷」意見書・資料集」, VAWW-NET Japan, pp.57～58
* 同法廷に提出された「専門家意見書」
- 04 【解説】「解説」, 『母と子でみる 52 20世紀の戦争 日中戦争2』, 草の根出版会, pp.168～174
- 04 【随想】「第1次博古研究会訪中団に参加して」, 『博古研究』21, 博古研究会, pp.45～51
* 共著者: 茂木雅博・奈良裕基・会下和宏・木下直子・竹中哲朗, 荒井執筆部分は p.47「高句麗古墳を訪ねる」(ただし文章ではなく, 道中の印象を詠んだ短歌11首)
- 05 【論説】「三・一運動のめざしたもの: 民族自決と日本の戦争」, 『共同研究 韓国と日本: 比較文化史的考察』, 駿河台大学(共同研究報告書), pp.1～17
- 05 【解説】「解説」, 『母と子でみる 53 20世紀の戦争 太平洋戦争』, 草の根出版会, pp.176～183
- 06 【解説】「解説」, 『母と子でみる 54 20世紀の戦争 沖縄地上戦』, 草の根出版会, pp.172～179
- 06 【談話】「戦争責任・植民地支配の清算こそ国益: 教科書問題の背景」, 『月刊 日本の進路』106, 自主・平和・民主のための広範な国民連合, pp.6～8 * 文責: 編集部
- 06 【随想】「〈リレートーク17〉戦争中の「自由主義」私観」, 『子どもと教科書全国ネット21 ニュース』18, 子どもと教科書全国ネット21, p.2
- 06 【声明】「歴史家7人による「つくる会」歴史教科書についての声明(付 近現代史部分の誤り・問題点)」, 『戦争責任研究』32 [特集 「つくる会」歴史・公民教科書批判], pp.86～92 * 共著者: 海野福寿・隅谷三喜男・高崎宗司・水野直樹・溝口雄三・和田春樹
- 08 【論文】「空襲の世紀の思想: 戦略爆撃と人種主義」, 『歴史評論』616 [特集 空襲の歴史とその記憶・記録], pp.2～12
- 09 【論文】「「失われた一〇年」と歴史認識問題」, 船橋洋一編『いま, 歴史問題にどう取り組むか』, 岩波書店, pp.25～54
- 09 【解説】「解説」, 『母と子でみる 55 20世紀の戦争 戦争と子ども』, 草の根出版会, pp.167～174
- 12 【論文】「民族自決主義と日本の戦争」, 『翰林日本学研究』6, 翰林大学校翰林科学院日本学研究所, pp.55～69 * 未見
- 12 【論説】「ローラバッカー法とサンフランシスコ講和条約」, 『戦争責任研究』34, pp.50～58 * 資料「2001年合衆国捕虜のための正義法案(ローラバッカー法案)」併載
- 12 【時評】「家永さん ノーベル平和賞始末記」, 『Let's』33, p.3
- 12 【監修】「歴史問題関連年表・資料」, 『世界』696 [別冊 歴史教科書問題 未来への回

答：東アジア共通の歴史観は可能か」, pp.178～196 ※作成：伊香俊哉

2002年

- 04 【講演】「失われた10年と歴史認識」, 『歴史』25 第2部, 東京大学教養学部歴史学研究会, pp.25～42 * 「「つくる会」教科書を問うシンポジウム」(2001.07.05開催)講演記録
- 05 【時評】「歴史認識などめぐり南京で平和フォーラム」, 『日中友好新聞』1937(05.25), p.2
- 06 【論説】「〈連続ゼミナール〉ホロコースト：記憶のたたかいと形象化」, 『戦争責任研究』36, pp.49～58
- 07 【共著】『母と子でみるA23 ホロコーストの跡を訪ねる』, 草の根出版会, 135p. ※本文執筆：荒井, 写真：山本耕二
- 08 【報告】「空襲の歴史と現在」, 政治経済研究所 東京大空襲・戦災資料センター編『東京大空襲・戦災資料センター開館記念シンポジウム 都市空襲を考える』, 政治経済研究所〈Seikeiken Research Paper Series〉, pp.5～18 * 「質疑応答」(pp.18～21)に荒井発言あり
- 11 【単著】『母と子でみるA26 中国 歴史と出会う』, 草の根出版会, 135p.
- 12 【翻訳・解説】グレッグ・ブラッドシャー著「日本の押収文書の行方1945～1962」, 『戦争責任研究』38 [小特集 情報公開と現代史], pp.50～56 * 荒井の補足(pp.55～56)
- 12 【随想】「〈追悼 家永三郎〉ノーベル平和賞候補者としてカナダからの呼びかけ」, 『図書新聞』2611(12.21), p.1 ⇒ 偲ぶ会編『家永先生・人と学問』, 2003.10 * 未見

2003年

- 02 【短文】「「歴史認識と東アジアの平和フォーラム」東京会議の呼びかけ」, 『歴史学研究』772, pp.49～50
- 03 【時評】「日朝国交正常化とピョンヤン宣言」, 『戦争責任研究』39, pp.65～72
- 06 【解説】「韓国国会・日本国の「戦時性的強制被害者問題の解決の促進に関する法律」の制定促進決議」, 『戦争責任研究』40, pp.50～51 * 荒井前書き「「慰安婦」立法促進の韓国国会決議」(p.50)
- 06 【随想】「藤原彰さんを偲ぶ」, 『Let's』39, p.3
- 11 【随想】「鈴木正四さんの思い出」, 『歴史に生きる 鈴木正四：一コミュニストとして歩んだ戦前・戦中・戦後』, 鈴木綾子, pp.399～404
- 12 【論説】「非人道兵器と人権」, 『戦争責任研究』42 [特集 「非人道的」兵器と人権], pp.2～10

荒井信一著作目録

- 12 【事典】「荒井信一『原爆投下への道』・「荒井信一『戦争責任論』」, 黒田日出男ほか編『日本史文献事典』, 弘文堂, p.51
- 12 【座談会】『「慰安婦」問題再考:「右」から「左」まで一緒に議論しよう』, 東工大JCプロジェクト実行委員会, 54p. ※出席者:和田春樹・日下公人・上野千鶴子・大沼保昭・橋爪大三郎 *未見

2004年

- 02 【座談会】「シンポジウム 「慰安婦」問題再考:「右」から「左」まで一緒に議論しよう討論」, 『論座』105, pp.126~131 ※出席者:和田春樹・日下公人・上野千鶴子・大沼保昭・橋爪大三郎
- 【報告】「基金は失敗した」, 同上「シンポジウム 「慰安婦」問題再考」, pp.120~121
- 03 【論説】『「軍国主義」覚書』, 『戦争責任研究』43 [特集 日本の軍国主義研究], pp.2~7
- 03 【時評】「イラク開戦のころ」, 『Let's』42, p.3
- 03 【論説】「日露戦争100年 伝えるべき「アジア」侵略の記憶」, 『日中友好新聞』1995(03.15), p.1
- 03 【書評】「小沢節子『「原爆の図」:描かれた〈記憶〉, 語られた〈絵画〉』」, 『歴史学研究』786, pp.48~51
- 04 【随想】「古今一体の道:兪偉超先生を偲ぶ」, 『博古研究』27 [兪偉超先生追悼号], pp.23~24
- 05 【随想】『「歴研」再建の力となられた先生のお人柄』, 下町人間総合研究所編・発行『庶民の歴史家 松島栄一』, pp.409~411
- 07 【論文】「帝国主義と脱植民地化:人種主義と多文化主義」, 内海愛子・山脇啓造編『歴史の壁を超えて:和解と共生の平和学〈グローバル時代の平和学3〉』, 法律文化社, pp.38~64
- 11 【論説】「日韓歴史学会合同シンポジウムによせて」, 歴史学研究会編『歴史教科書をめぐる日韓対話:日韓合同歴史研究シンポジウム』, 大月書店, pp.225~240

2005年

- 03 【報告】「ドイツにおける空襲の記憶」, 政治経済研究所 東京大空襲・戦災資料センター編『東京大空襲・戦災資料センターシンポジウム 都市空襲を考える 第3回』, 政治経済研究所〈Seikeiken Research Paper Series〉, pp.31~41 *「質疑討論」(pp.42~48)に荒井発言あり
- 03 【時評】「グアムの戦後補償問題」, 『Let's』46, p.3

- 05 【論文】「学徒兵の戦争体験と「近代の歪み」, 『歴史評論』661 [特集 戦争認識と「21世紀歴史学」の課題], pp.2~13
- 06 【論文】「戦後六〇年の時点で」, 『戦争責任論：現代史からの問い』, 岩波書店〈岩波現代文庫：学術146〉, pp.315~328. *同名单著(1995.07)文庫版の「補章」
- 09 【時評】「戦後60年：歴史問題と北東アジアの平和」, 『戦争責任研究』49 [特集 戦後60年], pp.2~7
- 12 【時評】「吉田茂と丹東」, 『Let's』49, p.3

2006年

- 01 【単著】『歴史和解は可能か：東アジアでの対話を求めて』, 岩波書店, 292p. ⇒韓国語版：김태웅訳, 역사 화해는 가능한가: 동아시아 역사 문제의 해법을 찾아서 (副題 東アジア歴史問題の解法を求めて), 미래 M&B, 2006. ⇒中国語版：『歴史和解的可能性』, 中国社会科学出版社, 2015.
- 01 【随想】「パウエル街：消えた日本人町」, 『岩波講座 アジア・太平洋戦争 月報』3 (同講座3付録), pp.1~3
- 05 【随想】「藤原彰さんを偲ぶ会 発起人代表あいさつ」, 藤原彰『天皇の軍隊と日中戦争』, 大月書店, pp.249~252
- 06 【報告】「空襲の世紀の思想を問う」, 『重慶大爆撃 会報』1, 重慶大爆撃の被害者と連帯する会・東京, pp.5~7 *「重慶大爆撃の被害者と連帯する集い」(2006.03.30, 重慶大爆撃訴訟提訴日) 記念講演
- 06 【短文】「『歴史認識と東アジアの平和』フォーラムの5年間」, 『戦後60年の歴史認識の総括と展望：「歴史認識と東アジアの平和」フォーラム・北京会議』, 北京フォーラムに連帯する日本委員会, pp.6~14 *同会議(2006.01.06~09)報告集
- 【短文】「北京フォーラム・フィールドワーク資料」, 同上『戦後60年の歴史認識の総括と展望』, pp.111~114
- 09 【論文】「空襲の世紀の法理と日本」, 『戦争責任研究』53 [特集 空襲を問う], pp.2~11
- 09 【随想】「三笠宮の話：古代オリエント研究と戦争体験」, 『Let's』52, pp.4~5
- 10 【論説】「中国戦犯政策の歴史的・政治的背景」, 『中帰連：戦争の真実を語り継ぐ』38 [特集 撫順：加害と再生の地から], 季刊『中帰連』発行所, pp.28~33
- 10 【随想】「日韓条約のころ〈本誌800号記念企画「歴研と私」19〉」, 『歴史学研究 月報』562, pp.6~7
- 12 【時評】「アメリカ下院の「慰安婦」決議と日本政府の妨害活動」, 『戦争責任研究』54, pp.40~43

2007 年

- 04 【談話】「空襲被害が照らし出す平和憲法の意義」, 『前衛』816, 日本共産党中央委員会, pp. 221~230
- 04 【随想】「天山南路の旅」, 『博古研究』33, pp. 39~46 * 「第6次博古研究会訪中国報告」中の一編
- 07 【座談会】「激論「従軍慰安婦」置き去りにされた真実」, 『諸君!』39-7, 文藝春秋, pp. 26~43 ※出席者: 秦郁彦・大沼保昭
- 07 【論説】「東アジアの歴史和解のために」, 『法と民主主義』420 [特集 南京事件70周年 国際連続シンポジウム 過去に向き合い, 東アジアの正義と和解を進める: アメリカシンポジウムから], 日本民主法律家協会, pp. 16~19
- 09 【時評】「米議会下院の「慰安婦」決議」, 『戦争責任研究』57 [特集 「慰安婦」決議と歴史認識問題], pp. 2~11 * 資料2点 pp. 9~11
- 09 【時評】「韓国併合の記憶と21か条要求」, 『Let's』56, p. 3
- 12 【論文】「空襲の歴史を見直す: 植民地主義の遺産」, 『戦争責任研究』58, pp. 74~81

2008 年

- 02 【論説】「ゲルニカ: 無差別爆撃のルーツ」, 政治経済研究所付属東京大空襲・戦災資料センター戦争災害研究室編・発行『シンポジウム「無差別爆撃の源流: ゲルニカ・中国都市爆撃を検証する」報告書」, pp. 5~15
- 03 【論説】「国際シンポジウムを終えて」, 『法と民主主義』426 [特集 南京事件70周年 国際シンポジウムの総括: 歴史和解の達成を求めて], pp. 14~17
- 06 【論文】「アメリカ議会下院と「慰安婦」問題」, 金富子・中野敏男編著『歴史と責任: 「慰安婦」問題と1990年代」, 青弓社, pp. 340~352
- 07 【随想】「網野善彦と共有した「戦後」」, 『網野善彦著作集 月報』11 (同著作集3付録), 岩波書店, pp. 1~4 ⇒岩波書店編集部編『回想の網野善彦: 『網野善彦著作集』月報集成』, 岩波書店, 2015. 03, pp. 22~26
- 08 【単著】『空爆の歴史: 終わらない大量虐殺』, 岩波書店〈岩波新書: 新赤版1144〉, 267p ⇒韓国語版: 윤현명, 이승혁訳, 폭격의 역사: 끝나지 않는 대량 학살, 어문학사, 2015. 05 * 荒井「韓国語版序文: 忘れられた戦争と爆撃の記憶」掲載
- 10 【随想】「序文」, 土屋公献『弁護士魂』, 現代人文社, pp. iii~v
- 12 【論文】「韓国「保護国」化過程における軍事と外交」, 笹川紀勝・李泰鎮編著『国際共同研究 韓国併合と現代: 歴史と国際法からの再検討』, 明石書店, pp. 231~256 * 同題の原論文は, 笹川紀勝・李泰鎮編『韓国保護条約の歴史学的国際法学的再検討国際共同研究「国家への条約締結の強制」東京会議」報告集』, pp. 35~50 (2006. 12. 20~21開催)に

掲載

【論文】「日本の対韓外交と国際法実践」, 同上『韓国併合と現代』, pp. 258~292

【翻訳】ジョン・M. ヴァンダイク「竹島／独島の法的諸問題」, 同上『韓国併合と現代』, pp. 729~795

12 【論説】「60号をこえた『戦争責任研究』」, 『戦争責任研究』62, pp. 52~56

00 【論文】「サンフランシスコ平和条約における請求権放棄と同条約26条の最恵国待遇の適用による賠償義務：海南島「慰安婦」事件に関連して」, 28p * 「平成18年（ネ）第4860号謝罪文交付等請求事件」（海南島「慰安婦」事件訴訟第2審）において東京高等裁判所第21民事部に提出された意見書

2009年

01 【概説】「重慶爆撃への道」（第I章）・「重慶爆撃の全体像—3 連合国の成立と中国の抗戦」（第II章）, 戦争と空爆問題研究会編『重慶爆撃とは何だったのか：もうひとつの日中戦争』, 高文研, pp. 19~40, 107~117

02 【報告】「東アジアの歴史和解のために」, 記録集編集委員会編『南京事件70周年国際シンポジウムの記録：過去と向き合い、東アジアの和解と平和を』, 日本評論社, pp. 195~199

07 【共著】東京大空襲・戦災資料センター編『東京・ゲルニカ・重慶：空襲から平和を考える〈岩波DVDブックPeace Archives〉』, 岩波書店, 123p. ※共著者：早乙女勝元・前田哲男・吉田裕・山本唯人・大岡聡・山辺昌彦

09 【論説】「[「相手国国民の権利および訴権の消滅、停止」と国際人道法：「サンフランシスコ平和条約の枠組み」批判]」, 『戦争責任研究』65, pp. 60~65

12 【論説】「韓国併合100年をどうとらえるか」, 『戦争責任研究』66 [特集 韓国併合100年：植民地支配を問い直す], pp. 2~10

12 【談話】「荒井信一さんのリプライ」, 『戦争災害研究室だより』23, 東京大空襲・戦災資料センター, pp. 4~8 * 第23回研究会（2009.04.12）「荒井信一『空爆の歴史』・田中利幸『空の戦争史』合評会」報告（報告者：植野真澄・木戸衛一）討論記録 ※文責：石橋星志・山辺昌彦

2010年

01 【随想】「靖国神社と映画「学徒出陣」」, 佐藤忠男編著『シリーズ日本のドキュメンタリー2 政治・社会編』, 岩波書店, pp. 37~42

01 【論説】「[「保護国化」から「併合」へ：日本は軍事と外交でどのように植民地化をすすめたか]」, 『前衛』852, pp. 188~199 * 談話にもとづく, 〈シリーズ「韓国併合」百年と

日本の進路〉の一篇

- 03 【書評】「吉岡吉典著『韓国併合』100年と日本』重要史料を提示し政府を追い詰めた軌跡」, 『前衛』854, p.166
- 04 【報告】「東京大空襲とアメリカ空軍」, 『統一評論』534, pp.48～53 *東京大空襲65周年朝鮮人犠牲者追悼国際シンポジウム
- 06 【論説】「日韓基本条約第2条：解釈をめぐる違いをどう解釈するか」, 『Let's』67, p.2
- 07 【論文】「植民地支配責任と向き合うために：韓国併合100年に寄せて」, 『世界』806, pp.93～102
- 07 【短文】「『歴史認識と東アジアの平和』フォーラムの8年」・「日本代表あいさつ」, 「歴史認識と東アジアの平和」フォーラム・東京会議編『東アジアの歴史認識と平和をつくる力：東アジア平和共同体をめざして』, 日本評論社, pp.1～14
- 10 【短文】「対話による解決こそが必要」, 子どもと教科書全国ネット21編著『竹島／独島問題の平和的な解決をめざして』, つなん出版, pp.3～5 *同書の序文に相当
- 12 【論説】「『韓国併合』と日本」, 歴史教育者協議会編『歴史教育・社会科教育年報2010年版 東アジアの平和構築に向けて』, 三省堂, pp.2～10
- 12 【短文】「コメント」, 『軍縮問題資料』360 [集会報告「戦後補償・立法を考える公開フォーラム」2010年・戦後補償問題の政治解決の可能性を考える(第2回)], 軍縮市民の会編／宇都宮軍縮研究室, pp.22～25
- 00 【論文】History textbooks in Twentieth century Japan: A Chronological Overview, *Journal of Educational Media, Memory, and Society* Vol. 2, Issue2, Autumn 2010, Oxford; New York: Berghahn Journals. Ltd. *未見

2011年

- 05 【論文】「韓国強制併合史をめぐる私の軌跡」, 歴史学研究会編『『韓国併合』100年と日本の歴史学：「植民地責任」論の視座から〈シリーズ歴史学の現在13〉』, 青木書店, pp.37～69
- 06 【論説】「朝鮮文化財略奪の舞台：韓国・江華島」, 『戦争責任研究』72 [特集 略奪文化財返還問題], pp.12～17
- 06 【報告】「空爆の歴史：終わらない大量虐殺」, 『重慶大爆撃 会報』19, pp.10～22 *連続学習講座(第19～20回, 2010.09.04・11.27)記録, pp.17～18に前田哲男「コメント」挿入
- 07 【随想】「〈リレー討論〉歴研創立80年に向けて2 戦後歴研の出発」, 『歴史学研究』881, pp.57～59
- 09 【時評】「〈世界の潮〉「朝鮮王室儀軌」の返還と植民地支配の清算」, 『世界』821,

pp. 33~36

- 09 【論文】「原爆投下命令の責任」について, 『戦争責任研究』73 [特集 原爆投下と被爆者], pp. 2~9
- 11 【随想】「野澤豊君のこと」, 『近きに在りて: 近現代中国をめぐる討論のひろば』60 [特集 野澤豊の歴史学], 同誌編集委員会編/野澤豊発行/汲古書院発売, pp. 5~6
- 12 【報告】「日米同盟と沖縄・グアム」, 「歴史認識と東アジアの平和」フォーラム・ソウル会議(ソウルフォーラム)日本実行委員会編・発行『日韓強制併合100年に考える東アジア平和共同体』, pp. 71~78 *第9回・同フォーラム・ソウル会議(2010.11.20~22)報告集
- 【短文】「歴史認識と東アジアフォーラム」ソウル会議・フィールドワーク資料, 同上『日韓強制併合100年に考える東アジア平和共同体』, pp. 128~131

2012年

- 05 【論説】「『朝鮮王室儀軌』の返還と植民地支配の清算」, 『韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議年報』1(2012), 同会議, pp. 2~4 *2011.09『世界』掲載論考に加筆したもの
- 【声明】「〈提言〉朝鮮半島由来の文化財の総合的な調査と包括的な返還促進のための立法措置を! : 「日韓図書協定」国会承認を受けて」(2011.05.27), 同上『韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議年報』1(2012), p. 15
- 07 【単著】『コロニアリズムと文化財: 近代日本と朝鮮から考える』, 岩波書店〈岩波新書: 新赤版1376〉, 214p. ⇒韓国語版: 이태진・김은주訳, 약탈 문화재는 누구의 것인가: 일제의 문화재 반출과 식민주의 청산의 길 (略奪文化財は誰のものか: 日帝の文化財搬出と植民地主義清算の道), 태학사, 2014.05
- 08 【書評】「慧問著/李素玲訳『儀軌: 取り戻した朝鮮の宝物』 文化財還取運動にみる亡国の悲しみと民族的自尊心: 日韓朝100年の歴史を経てなお問われる植民地支配の清算」, 『図書新聞』3075(08.18), p. 8
- 09 【談話】「〈月曜インタビュー〉植民地の文化財返還/東アジアの今後見据え」, 『しんぶん赤旗』09.03, 日本共産党中央委員会, p. 9 *文責: 隅田哲
- 09 【対談】「真の「和解」を求めて: 中帰連精神とその継承」, 『中帰連』50 [創刊50号記念特集], pp. 6~20 *対談者: 姫田光義
- 11 【論文】「社会科「世界史」と教科「世界史」: 帝国日本版「世界史」の克服は?」, 『歴史学研究』899 [特集 新自由主義時代の歴史教育と歴史意識], pp. 23~29

2013年

- 03 【論文】「終わらない戦後」, 安田常雄編『シリーズ戦後日本社会の歴史4 社会の境界を

- 生きる人びと：戦後日本の縁』, 岩波書店, pp.248~277
- 03 【講演】「近代歴史学の形成とコロニアリズム」, 日韓文化交流基金編・発行『世界史における中国：第12回日韓・韓日歴史家会議報告書』, 日韓文化交流基金, pp.9~18 * 同会議記念講演会「歴史家の誕生」での講演
- 06 【時評】「6月23日に思う：都議選と沖縄戦慰霊の日」, 『Let's』80, p.2
- 07 【声明】「対馬の仏像盗難問題に関する私たちの見解」, 『韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議年報』2 (2013), p.2 * 同連絡会議代表として
- 08 【論文】「『東アジアの大乱』と植民地主義」, 笹川紀勝・邊英浩監修／都時煥編著『国際共同研究 韓国強制併合一〇〇年：歴史と課題』, 明石書店, pp.150~168
- 08 【談話】「モニュメント作り 歴史継承を」, 『毎日新聞』08.06朝, p.11 * 「海境ニッポン：対馬 下」記事に付載
- 11 【論説】「世界史における東京裁判」, 上海交通大学主辯・蘇州大学協辯『東京審判国際学術討論会論集』, 2013.11.12~14, pp.20~29 * 未見
- 12 【論説】「文化財の返還について」, 和田春樹・内海愛子・金泳鎬・李泰鎮編『日韓 歴史問題をどう解くか：次の100年のために』, 岩波書店, pp.195~205

2014年

- 03 【談話】「日本軍「慰安婦」当時の国際法にも違反／「河野談話」が認めた“強制性”」, 『しんぶん赤旗 日曜版』03.30, p.10
- 06 【時評】「アメリカの無人機攻撃と人権理事会」, 『戦争責任研究』82 [特集 空襲研究の最前線], pp.30~37
- 06 【随想】「韓国・朝鮮の人々の「悔しさ」について」, 『韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議年報』3 (2014), pp.4~5
- 【声明】「日韓の文化財返還問題に関する政府間の直接対話の提言」(2013.11.03付, 韓国・文化財庁長, 日本・文化庁長官 宛), 同上『韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議年報』3 (2014), p.2

2015年

- 03 【論説】「多様化する空爆テクノロジー」, 『歴史地理教育』831 [特集 空襲：空からの破壊と虐殺], pp.12~19
- 05 【書評】「ジョン・トーピー著／藤川隆男・酒井一臣・津田博司訳『歴史的賠償と「記憶」の解剖：ホロコースト・日系人強制収容・奴隷制・アパルトヘイト』」, 『歴史評論』781, pp.104~108
- 06 【講演】「文化財返還と植民地主義の清算」, 『韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議年報』

- 4 (2015), pp. 3~4 * 『コロニアリズムと文化財』韓国語版出版記念フォーラムでの講演 (2014. 12. 18, ソウル)
- 12 【監修】黄壽永編, 李洋秀・李素玲共訳・補編『韓国の失われた文化財: 増補日帝期文化財被害資料』, 三一書房, 547p.

2016年

- 08 【時評】「対テロ戦争とパレスチナ問題」, 『歴史学研究』947, pp. 48~56
- 11 【談話】「朝鮮王朝儀軌「一〇〇年ぶりの帰郷」と文化財返還運動」, 鄭求宗『日韓2000年あたらしい未来にむけて』, 晩聲社, pp. 83~102
- 12 【時評】「〈歴史の眼〉2015年「慰安婦」問題日韓合意について」, 『歴史評論』800, pp. 73~83
-

荒井信一著編書に対する書評 * 主要学会誌・主要新聞に限った

『第二次世界大戦』

- [無署名], 『読売新聞』1973. 03. 05 朝, p. 8
- [無署名], 『朝日新聞』1973. 03. 19 朝, p. 11
- 山極潔, 『歴史学研究』400, 1973. 09, pp. 62~64

『現代史におけるアジア』

- [無署名], 『朝日新聞』1977. 05. 30 朝, p. 9
- 中村尚美, 『歴史評論』341, 1978. 09, pp. 101~103 * 「読書ノート」

『原爆投下への道』

- 立花誠逸, 『歴史学研究』564, 1987. 02, pp. 55~58
- 吉田守男, 『日本史研究』298, 1987. 06, pp. 95~100

[共編]『現代史における戦争責任』

- 星乃治彦, 『歴史評論』498, 1991. 10, pp. 91~95, 102

『ゲルニカ物語』

- [無署名], 『日本経済新聞』1991. 02. 03 朝, p. 21 * 短評

荒井信一著作目録

『戦争責任論』

- 杉山光信, 『朝日新聞』 1995. 9. 17 朝, p. 13
岡部牧夫, 『戦争責任研究』 11, 1996. 03, pp. 76~79
木畑洋一, 『歴史評論』 556, 1996. 08, pp. 78~82
清水正義, 『歴史学研究』 693, 1997. 01, pp. 58~60

『空爆の歴史』

- 木戸衛一「〈書評〉 普遍主義的空襲史研究の新段階：田中利幸『空の戦争史』・荒井信一『空爆の歴史』に寄せて」, 『政経研究』 93, 政治経済研究所, 2009. 11, pp. 120~129

『コロニアリズムと文化財』

- 藤原貞朗, 『日本経済新聞』 2012. 08. 12 朝, p. 21
岡田温司, 『読売新聞』 2012. 09. 02 朝, p. 15

【付記】

1. 本目録作成の経緯

昨 2017 年 10 月、歴史家の荒井信一氏が逝去された（以下、敬称略）。1926 年生まれ、享年 91 であった。西洋現代史を中心としつつも、戦争責任や植民地主義の問題を視野に入れた広角の国際関係史を展開され、まさに世界史家と呼ぶにふさわしい歴史家であった（その業績の意義については、さしあたり笠原十九司「荒井信一の歴史学の意義」, 『歴史学研究』 973 号, 2018 年 8 月, を参照されたい）。60 年以上に及ぶ研究者・教育者・市民運動家としての活躍は、後続の世代に多くの影響を与えた。その人と業績を偲び、また追悼の場とすべく、有志の呼びかけによって、本年 3 月 4 日、「荒井信一さんを偲ぶ会」が開催された。事務局は、笠原十九司（代表）・吉田裕・林博史・波田永実・伊香俊哉・戸邊秀明が務めた。

本著作目録は、その「偲ぶ会」会場で配付した資料冊子中の目録を原型としている。作成にあたっては、まず戸邊が複数の文献検索システムを用いて素案を作り、これに荒井自身が折々に作った業績表や、荒井自宅の著作ファイルの探索をふまえて笠原から提供された書誌事項を増補した。その後、それらをできるだけ実物と照らし合わせ、戸邊が成稿とした。その間、「偲ぶ会」事務局参加者からさまざまに助力を得た。

著書や主要論文にとどまらない網羅的な荒井の著作目録は、今回が初めてであり、荒井をよく知る人にとっても、新たな発見が得られるものであった。そこで、当日の参加者以外にも、荒井の業績とその意義を広く知ってもらい、利用の便に供する機会を得たいと考えるに至った。

しかし限られた日程でまとめられたため、すでに当日の参加者からいくつかの不備が指摘された。また荒井の茨城大学在職期の知友が主催される雑誌『博古研究』の最新第55号(2018年4月)掲載の著作目録(石島紀之作成)からも、いくつかの文献が漏れていたことを教えられた。そこで、あらためて文献に当たり直し、記載事項を増訂し、戸邊の勤務校の紀要に掲載することとなった次第である。

今回の増訂に際して、ご子息・荒井潤さんの全面的なご協力のもと、幸いにも荒井の自宅の一部整理をする機会に恵まれた。その結果、書斎以外の部屋に別置されていた資料などから多くの新たな文献を確認でき、約3割増の点数にのぼった。その成果が本目録である。

2. 採録文献に関する留意事項

しかしながら、冒頭の凡例で述べたように、本目録はあくまで暫定版にとどまる。半世紀を優に超える活動期間と広範な執筆領域ゆえ、もとより完璧は期しがたい。それにしても、いくつかの課題が残ってしまった。今後の探索のよびかけも兼ねて、以下に留意点をまとめておきたい。

まず荒井の研究や思索が発表された媒体は、出版物として公刊された文献にとどまらず、簡易製本のシンポジウム資料集やNGO等の市民運動のニューズレターなど、それ自体が暫定的な性質をもち、少数の発行であることが少なくない。報告・講演の要旨では、概要を簡条書きしたレジメ風のものから、読み上げ仕様に整っているものまでさまざま。とりわけ戦後補償や戦争責任をめぐる取り組みが国際的にも活発化し、市民運動として調査・研究活動が組織されていく1990年代以降、そのような資料が格段に増えていく。それらの書誌事項をすべて確認し、目録に反映させることはできなかった。そこで今回は、①有償無償や造本の体裁を問わず冊子体で制作され、②文章体で記録された文献に、採録を限った。とはいえ、荒井の思索の軌跡をたどるには、関連史料にコメントを付した比較的簡易な形式のレジメなどから、かえって多くの示唆が得られる場合がある。それらを今後、どのように活かしていくかは課題として残る。

次に、未発見の文献が、なお相当数見込まれる。前述の1990年代以降については、国際会議での発表や市民集会での講演などで、まだ確認できていないものがある。同時に、荒井が成蹊高校で専任職に就く以前の1950年代までに執筆・発表された文献があるだろう。それらのなかには、今のところ所蔵先がまったく確認できない雑誌に発表されたものもある。存在そのものを把握できていない文献も多いはずだ。また事典類への執筆項目についても、探索があまりに広範にわたるため、確認できた一部の項目を除いて、今回は記載を断念した。これらについては、探索の仕方や目録記載の方法も含めて、今後の課題としたい。

第三に、他の言語で翻訳・発表された文献についても、多くの脱漏があると思われる。なお荒井の韓国語翻訳文献については、「偲ぶ会」で配付した目録を準備するにあたり、上山

由里香・洪宗郁のお二人から助力を得た。ただし今回はなお探索途中のため、単著の翻訳以外は記載を見送った。英語・中国語等での発表文献の探索・照合も含めて、これも今後の課題である。

第四に、教科書の執筆があげられる。荒井は三省堂の高校用世界史教科書の執筆に長く携わっていたが、いくつかの版で執筆を確認できたにすぎず、執筆に参加したすべての期間や版の特定ができていないため、今回は一括して割愛した。教科書と併せて発行されている高校教員用の『指導書』にも執筆していることがわかっており、その確認も含めて、書誌事項を整備していきたい。

第五に、本目録に記載した無署名文献について述べておく。本目録では1978年春から81年初頭までの間に「※無署名」とある文献が目立っているが、これは荒井が『朝日新聞』の書評委員を務めた際に同紙に執筆した書評である。従来、書評委員就任の事実は知られていたが、同紙の書評記事は当時無署名のため、荒井が執筆した書評は特定できていなかった。ところが今夏、荒井の自宅を整理した際、『朝日新聞』に掲載された当時の書評を、同時期の他紙掲載記事（こちらは荒井の署名入り）とまとめて綴じたルーズリーフのファイルが見つかった。他人の記事の切り抜きをこのように整理した例は、荒井の遺した資料群に見られなかったため、これは荒井自身が控えをつくったものと見てよいと判断した。他の無署名記事の特定も、ほぼ同様に荒井自身の切り抜きがあるか、もしくは生前の荒井自身から戸邊が執筆を確認できたものである。もちろん、これ以外に多くの無署名記事や、おそらく1950年代には代筆に近い仕事があったであろうが、それはいまとなっては確認できない。我が身の怠慢を恥じるほかない。

3. 採録事項から見えてくる課題

最後に、今回の目録編集作業から新たに見えてきた研究課題について摘記しておきたい。それは「歴史教育」という領域が、戦後日本の歴史学研究的形成に果たした役割の重要性である。

現代史家という研究の面で議論されがちな荒井だが、その軌跡をたどると、荒井史学の形成にとり、歴史教育、とりわけ戦後新しく発足した高等学校段階の「世界史」教育をめぐる議論への参加が、大きな意味を持っていたことがわかる。荒井が、しばらく高校教員を務めていた経験を指しているのではない。目録からわかるように、歴史教育研究所などで1950年代半ばからすでに発言を始めている。しかも、そこで培われた人間関係と議論は、その後も長く、同研究所への関わりを中心に持続した。

このような背景は、荒井に限らず、同世代の（とりわけ西洋史・東洋史の）歴史研究者に共通する素地かもしれない。だが、従来の史学史では、このような水脈を適切に位置づけられていない。この点は、荒井の文章が多く掲載された歴史教育関係の媒体が、史学史では軽

視されがちであることとも重なっている。歴史教育に関係する学会の機関誌にとどまらず、教科書会社が発行する定期刊行物の類など、本来は多様な媒体や回路によって歴史教育の知が形成され、流通している。その領域とは、歴史研究にとり、どのような意味と機能を有していたのか。歴史研究と歴史教育が互いに独立性を高くした現在では、見失われてしまった「歴史学」の全体像を展望するためにも、そうした領域に対する関心が求められる。このような点を実証的に詰めていくためにも、荒井信一の歴史学から、私たちは今後も長く学んでいかなくてはならない。